
ギンイロトラベラーズ

冬華 蜜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギンイロトラベラーズ

【Nコード】

N7555R

【作者名】

冬華 蜜

【あらすじ】

真選組のあの人達と新八・神楽が銀ちゃんの過去へタイムトラベル！

タイムトラベル！？嘘だと言ってくれ！！（前書き）

色んな作者様のタイムスリップモノを読ませていただき、自分でも書いてみたくなりました。。。

まずは、あの人がタイムトラベル！！

タイムトラベル！？嘘だと言ってくれ！！

彼が目を開けたら、青一色の景色が視界に飛び込んできた。有り得ないくらいに何もない空。

― 宇宙船はどうした？なぜターミナルが見えない？てか、滅茶苦茶のどか過ぎじゃね？

そんな事を思いながらボーっと空を見上げていると。いきなり子どもが自分の顔を覗き込んでくる。

「お前、誰だ？」

首を傾げて子どもは問う。だが、それはこっちのセリフだ、と彼は思う。

― この顔にピンときたら110番の・・・何度見たか知れない顔の・・・ちっこい版が目の前にいやる。

「どうしてこんなところで寝てるんだ？」

首を傾げる子どもになんと答えたら良いのかわからず、彼は同じように首を傾げた。

「・・・あー、それは・・・」

「ヅラァ」

「ヅラじゃない桂だ！！」

答えようとしたその時、また違う顔が視界に入った。

「まだ……またこの顔にピンときたら110番だ!! おまわりさーん!! って、俺だ俺!

セルフツツコミをした後、彼はむくりと起きあがり、周りを見渡して、2人の子どもに視線を移しガリガリと後ろ頭を搔いた。

「……………すまん、ここ、どこ?」

「萩」

「……………萩ィ!!?」

目を丸くして叫ぶ。確か自分は江戸の見回りをしていて……それから町外れの森の辺りまで来た所でパツタリと記憶が途絶えていた。

「なあ、ヅラ。コイツ誰?」

「ヅラじゃない桂だ!……というか俺も知らん」

「つたく、しょうがねエなア、ヅラは。……で、お前、誰だよ」

ヅラじゃない桂だ!と叫ぶ子どもを無視して、目つきの悪い子どもは彼をジロジロと見やって問うた。

「……………人に名前を訊ねる時は、まず自分の名を名乗るもんじゃねエのかよ?」

なんとなく素直に答えたくなくて、彼はそう言ってみる。

すると、その言葉に子ども達は反応してムツとしながらも答えた。

「俺は桂小太郎だ」

「………高杉晋助」

その名を聞いて彼は確信した。

「えーと、これはアレだ。よく聞くアレ……そう、タイムトラベルとかいう……それか夢！つーか夢希望！！こんなの有り得ねエ……。でもよく考えろ、俺。夢ってのは知ってるモンを見るもんじゃねーのか？テロリスト共のガキの頃の姿なんぞ俺は知らないぞ！？」

「おい！俺達は名前を言ったのに、お前は名前を言わない気か！！」

プリプリと怒りながら詰め寄って来るチビ高杉に、彼はハツとして妙なスパイラルに嵌りそうだった思考を止めた。

「あ、ああ……俺は土方だ。土方十四郎」

そう彼は紛れもなく、泣く子も黙る武装警察真選組副長土方十四郎その人だった。

うちの子知りませんか？

「おーい、かーぐらあゝ？新八ィゝ？」

プラプラと歩きながら従業員の姿を探すもまったく見つからない。
秘かに焦り始めた頃、見慣れた黒服が向こうからやって来た。

「ああ、旦那。久しぶりでさア」

「・・・いやいや、総一郎君？つい昨日会ったばかりだからね？」

「総悟でさア、旦那」

のんびりと答える沖田にいつもツツコミを入れている男が今日に限
っていない事を銀時は呪った。

「・・・一人なんて、珍しいじゃないの。お目付け役土方はどーしたア？」

「さあ？見回りに行ったきり戻ってこないんでさア。きっと攘夷浪
士かなんかに殺^ヤられて天に召されたんですぜイ」

「もしもーし、沖田くーん？それ、かなりお前の希望入ってないで
すかー？・・・てか、副長さんもうねエのか」

沖田にツツコミ終えた銀時は、フツと思案気な表情になる。

「もってこたア、旦那んトコも誰かいなくなっただんでイ？」

「あー、ウチのガキ共が朝から見当たらねーのよ。神楽もそうだが、お妙に聞いたら新八も出て行った様子は無いのに部屋はもぬけのからだったらしいんだよねエ、これが」

たいして心配していないように装いながらも酷く心配しているのがバレバレな銀時に、沖田はクスリと笑った。

「土方コノヤローを探すついでに、ガキ共も見つけたら旦那に連絡しまさア」

「！・・・あー、悪いねエ・・・俺も、副長さん見かけたら総一郎君に連絡するよ」

「総悟でさア、旦那・・・ま、でもよろしく頼みましたぜイ」

ひらりと手を振り、沖田は町外れの林の方へと向かっていった。

「・・・さて、俺も探すかア・・・ったく、どこに行ったのかねエ、アイツらは」

「・・・えーと、ここはどこだろう？てか、僕今まで家にいたと思っただけど」

「さっきからブツブツ煩いアルよメガネ」

「神楽ちゃん!!? メガネじゃないからね!! 新八だからね!!」

「いちいち叫ぶんじゃないねーアルよ、だからお前は新八アル」

「ぐほっ!!」

ドスツと傘の先でみぞおち付近を突かれ、新八は脂汗を大量に流しながらその場にうずくまった。

そんな新八を冷めた視線で見やり、神楽は辺りを見回した。

「・・・確かにここはかぶき町じゃないネ。ターミナルも無いし、お城も無いアル」

「ッ・・・た、確かにそうだね・・・」

どうしたものかと途方に暮れていると、背後から複数の足音が聞こえた。

振り返った先には、やる気の無さそうな表情をうかべて刀を後生大事に抱えている銀髪天パの子どもと、それを優しげな表情で見つめている灰茶色の長髪の男性がいた。

先にこちらに気付いたのは、銀髪天パの子どもの方だった。

「・・・誰？」

こちらを見つめてくる目は不安と警戒の色がうかんでいた。

「あ、えっと、僕達はけっして怪しい者では・・・」

「・・・そちらの方は、天人だったりしますか？」

「!？」

「そうアル」

天人と見ればすぐに斬りかかって来るような相手ならばマズイと思
いながら、新八は頷いた神楽を背後に隠した。

「・・・ああ、大丈夫ですよ。別に天人だからといってこのような
可愛らしいお嬢さんを斬ったりなんかしませんから」

ニコリと笑った男性は、その手を差し出し名を名乗った。

「私は吉田松陽と申します。この子は・・・ほら、自己紹介なさい」

「銀時・・・坂田銀時」

ヒュ、と息を呑んだ2人に銀時は困った様子で首を傾げる。

「すみません、この子はあまり人に慣れていないので・・・お気に
障ったなら許してあげてください」

謝罪を口にした松陽に、新八は力一杯首を振った。

「いえ! 違うんです!!・・・その、知り合いによく似た風貌だな
ーと思っていたら名前まで似てたんで・・・」

「・・・そうでしたか。もしよろしければ、お名前を教えてくださいませんか？」

「あ、えっと、志村新八です。彼女は神楽って言います」

「・・・よろしくアル」

そんな2人を見つめ、松陽は優しげな笑みをうかべたまま頷いた。

「良ければ、ウチにいらっしやいませんか？どうやらお困りのようだし」

「松陽先生!？」

ギョツとする子ども・銀時の頭を撫でて松陽は笑う。

「ふふ、お前だってそうやってウチに来たでしょう？困っている人を見たら助けてあげないといけませんよ。情けは人のためならずって言うじゃありませんか」

「・・・う」

呻いた銀時はチラリと新八と神楽に視線を向け、目が合った瞬間に松陽の背に隠れる。

「・・・えっと、じゃあ・・・お世話になります」

戸惑いを隠せないままそう告げて、新八は松陽に向かって頭を下げた。

再会ってフツー感動するもんじゃね？

「あー、めんどくせエ・・・なんで俺が土方のヤローを探さなきゃならないんでイ」

ブツブツと呟きながら林の中の草むらを探す沖田。

「おーい、土方さーん。・・・いたら返事しろってンだよ、クソヤロー」

どれだけ悪たれをついても返答はない。

だが、土方のいつもの見回りのルートをしらみつぶしに探して、最後に残ったのがこの林の中なのだ。

「どこに行っちゃったんでイ、土方のヤローは」

近藤に頼まれてしまえば嫌とは言えない。渋々探しに出たがこうも見つからないと段々心配になってくるものだ。

溜息をついてフツと太陽を見上げた時だった。突然目の前が暗くなって沖田の意識はプツリと途絶えた。

ツンツン・・・

何かの先でつつかれる感触。

「・・・やめ」

ツンツンツン・・・

徐々にしつこくなってくるその感触に、沖田の意識がだんだんハッキリしてくる。

「やめ・・・ろ」

ツンツンツンツンツンツン・・・

「だああああ！！やめろって言ってるんでイ！！」

ガバツと起きあがった沖田の目の前には、見慣れたチャイナ服とメガネがいた。

「・・・チャイナに、メガネじゃねーですかイ。旦那が心配して探してましたぜイ」

「あ、あの、沖田さん・・・メガネじゃなくて新八です。そして、周りを見てください・・・」

新八の言葉に首を傾げ、沖田はぐると周りを見回して・・・口元を引き攣らせた。

「・・・どういコトでイ・・・これは」

妙に明るいとは思っていたが、先程までいた林の中ではなくどこかの道端で、しかも見慣れない景色が広がっていた。

「この方達のお知り合いのようですが・・・お困りのようでしたら、一緒に私達の家に行きましょう？・・・ああ、申し遅れました、私は吉田松陽と申します」

柔らかな声に視線を上げると、灰茶色の長髪の男性がにこやかにこちらを見ていた。

「俺は沖田総悟でさア・・・あのー1つ、聞いて良いですかねィ」

「ええ、私に答えられることでしたら」

「ここは、どこですかィ？どうも俺達の知る場所じゃねェんですが」

「ここは萩ですよ」

「・・・萩？こりゃまた、随分と遠くまで来ちゃったもんですねィ」

あっさりと自分の置かれた状況を受け入れた沖田に神楽と新八は顔を見合わせる。

それから2人でガッチリと沖田の両腕を抱え、引き摺るようにして松陽達から離れた。

「・・・なんでィ？イキナリ」

引き摺られて不機嫌そうな沖田の問いに神楽が言葉を発する。

「場所だけじゃないアルよ」

「はア？」

「移動したのは場所だけじゃないんです！時間もなんです！！」

2人が懸命に説明するのを聞いて、沖田はやっと今の状況を把握した。

「つまりは、タイムトラベルってヤツで旦那の過去に來ちまったってことで良いんですかねィ？」

「・・・たぶん、そうだと思います」

「あの人の後ろを見るヨロシ、ちっちゃい銀ちゃんが隠れてるネ」

頷く新八と神樂の示す方を見れば、確かに銀時のちっこい版が松陽の後ろに隠れて警戒心バリバリの様子でこちらを見ていた。

「おお・・・確かに旦那のちっちゃい版でさア・・・」

思わず感嘆し、沖田は銀時に近づいた。

「俺は沖田総悟といますア、アンタは？」

「・・・坂田銀時」

銀時はそう答えると、サッと松陽の後ろに隠れてしまう。

「・・・すみません、この子は極度の人間不信に陥っていたことが

ありましてね、未だに知らない相手にはこのような有様で・・・」

「あー、いや、気にしてねーですぜい。それよりも吉田さんといいましたねい、向こうのガキ共々お世話になりやす」

沖田は答えて、彼にしては珍しく素直に頭をさげた。

「いえいえ、ウチは私塾をしていますがね。子どもが出入りしますから、その話相手になって頂ければ嬉しいです」

「へエ、塾ですかい・・・」

松陽と沖田が話しながら歩き始めたので、銀時も松陽に寄り添うようにして歩き出す。

その背中を見つめながら、新八と神楽もゆっくりと歩き始めた。

「・・・ねえ、神楽ちゃん・・・本当に、僕達ついて行って良いのかな・・・？」

「わからないネ・・・銀ちゃんの昔のコトは知りたいアル。でも、勝手に見ちゃったら銀ちゃん、怒るかもしれないアル」

「・・・そう、だよね」

本当は元の時代に戻るまでどこかでじっとしていようと思っていた。だが、松陽の笑みに誘われるように世話になることを決めてしまった。

沖田は精力的に松陽から今の状況を聞き出そうとしているが、その

沖田に対する銀時の警戒心は並ではない。

「本能でわかってるのかな、沖田さんが幕府側の人間だって」

「・・・サドヤローのことを警戒するなんてさすが銀ちゃんアル。そのまま持つてる刀で斬っちゃえばいいネ！」

「ちょ、それはマズイから！！今は1人でも多く同じ立場の人間で固まってる方が安全だから！！」

「チッ」

「舌打ちしたよおおお！この人おおお！！」

ぎゃあぎゃあど騒ぎ始めた新八と神楽を振り返り、沖田は呆れたように溜息をついた。

「やれやれ・・・こんな状況ときでもはしゃげるなんぞ、旦那はいったいどんな教育してるんですかねィ」

「フッフ、楽しそうですね。子どもは元気が一番ですよ」

ぼやく己の脇で松陽がニコニコとしながら言うので、沖田は苦笑をうかべた。

「吉田さんと話していると、緊張してんのがアホらしくなってきまさら」

「緊張がずっと続くと疲れますからね、そういう時は一度頭の中を空っぽにしちゃうと良いですよ」

「空っぽねエ・・・」

沖田はニヤリと口元を歪めた。

この際だからこの状況を楽しめばいい。何よりも、知りたいと思っていた掴みどころのないあの“坂田銀時”の過去を覗けるのだから決して悪い状況ではない。

「・・・・・・・・そうですね、悪くないでさア」

そう頷いた沖田を、チビ銀時はわずかに警戒心を解いて不思議そうに見つめていた。

現実には早々に受け入れようぜ☆

一方、土方はうんうんと唸りながら、2人のテロリスト（将来の進路予定）の背中を追っていた。

「・・・なんかおかしい奴だな、本当に先生のところに連れていくのかよ？」

そんな土方をチラリと振り返り高杉が眉間にしわを寄せる。

「あやしい奴だからこそ先生にどうするかを訊ねるべきだろう」

そんな高杉を桂が大真面目に諭す。

「・・・そんなもんかア？」

「そんなもんだ」

バリバリに警戒心を見せる高杉と妙に人の良さと真面目さがにじみ出ている桂。敵だ、テロリストだ、駆逐するべき相手だ、と思いつながらこのように無邪気な様子を見せられるとその気持ちが折れてしまいそうになる。

「（くそッ・・・借りなんぞ作ったら後でやりづらくなんじゃないか！）」

そうは思うが自分のまったく知らない場所で、しかも過去に遡さかのぼっているとしたら、情報は必要だろう。

ようやくいつもの冷静さを取り戻した土方は盛大な溜息をついた。

「おい」

ちび高杉が土方を睨むように見上げる。

「・・・なんだ？」

「妙なことしたら、たたっ斬るからな」

この程度の威嚇にビビるようでは真選組副長なんぞは務まらない。しかも相手は子どもだ。だが、ここで反発して相手を余計に警戒させて情報を得られなくなることは避けなければならなかった。

「・・・ああ、わかった」

だから素直に頷き、土方は案内されるままに歩を進めた。

そして、案内されたのは小高い丘に建てられた民家だった。奥には別棟があり、何やら子ども達がわらわらと集まっていた。

「あ、しんすけ、こたろー」

「おかえりー」

その中の数人が高杉と桂に走り寄って来た。

「・・・先生は？」

「「「まだ」」」」

高杉の問いに子ども達は一斉に首を横に振る。

「ソイツ誰？」

「土方十四郎っていうんだとよ」

「また拾ってきたのかよー」

「またって、前に拾ってきたのは俺たちじゃなくて先生だろ」

どうやらこの2人は子どもの時分よりリーダーの素質があったらしい。明らかに他の子ども達から一目置かれている様子が見て取れる。

というか、また拾ってきたというのが気になる。

「先生の帰りが遅い日って、いつも“ナニか”拾ってくるんだよねー」

1人の子どもがぼやけば、高杉と桂はウツと呻いた。

「先生、お人好しだからなア・・・」

「いつか騙されるんじゃないかと心配になるくらいにな」

「あー、だからお前ヅラなんだ」

「ヅラじゃない桂だ！！そしてこれは地毛だ！！」

このかけ合い何度目だろうかと土方が何とも言えない表情で見つめていれば、周りを取り囲んでいた子ども達が呆れながらも笑う。

「また、しんすけとこたろーのケンカが始まったよ」

「なー、ぎんはどこ？あの2人を止められんの松陽先生かぎんだけだぜ？」

「ぎんは先生と一緒にお使いに行ったんじゃなかったか？」

「げ、最悪じゃん」

なんととはなしに話を聞いていた土方は、“松陽先生”と“ぎん”という人物がこのまとまりの中で特別な位置にいることを理解する。

「(ぎん？・・・ぎんって・・・どっかで聞いたことのあるような・・・)」

止まらない高杉と桂のケンカと、それを遠巻きに見て途方に暮れている子ども達。それらを眺めながら土方は思考に耽っていた。

と、その時、複数の気配が近づいてくるのに気付き、土方は己が入って来た門の方へと視線を向けた。

「ただいま戻りましたよ」

柔らかな物腰のまだ青年のようにも見える男性がにこやかに子ども達に告げる。

「あ、先生！お帰りなさい！」

「うん、ただいま」

「松陽先生！お土産は？」

「ありますよ、草餅、後で皆で食べましょうね」

「ねー、しんとこたろーがケンカしてるー」

「おやおや、困った子達ですねエ」

男性の周囲を取り囲み一斉に話しかける子ども達。相当煩いに違いないのに男性は笑みを崩さないままに1人1人の話に耳を傾けてやっていた。

「（・・・なるほどな、アレが“松陽先生”か）」

土方が注意深く見守る中、ほけほけと笑いながら子ども達の訴えを聞いていた松陽は後ろを振り返る。

「銀時、晋助と小太郎を頼みましたよ」

「・・・うん」

トテトテと松陽の後ろから出て来た子どもを見て、土方はギョツと目を瞠った。

「（よ、万事屋！?）」

「晋助く小太郎くやめろってエ」

「ウルセエぞ銀！」

「そうだ！銀時、お前は黙っている！！」

間に割って入って止めようとした銀時はすごい剣幕で2人に怒鳴られ、スツと無表情になって告げた。

「…………泣くぞ。泣くからな？覚悟は良いか？」

うりゅ、と銀時の目が潤む。

「「あああああっ！！！待て待て待て！泣くな！ケンカはやめる！やめるから泣くなアアアアッ！！！！」」

慌てて銀時を宥め始めた2人を呆然と見やっていた土方の背を誰かがポンポンと叩く。

くるりと振り返った土方はビシリと固まった。

「あー、やっぱり土方さんもこっちに飛ばされてたんですねィ……俺達もいつの間にかこっちに飛ばされてやして……」

「サドヤロー、駄目ネ。マヨは話を聞いてないアル」

「ひ、土方さん！しっかりしてください！！」

沖田が説明しているのを止めて神楽が呆れたように土方を見やり、慌てて新八が土方を揺する。

「・・・つたく、使えねエヤローでさア」

「まったくアル」

「アンタらねエッ!! 皆が皆アツサリ現状を受け入れられるわきやないんですよッ!!!!」

やれやれと肩を竦めている沖田と神楽（妙に息があっているのは何故だろうか）に、新八は思わずツツコミを入れたのだった。

この状況では先輩です！

「・・・つーことはアレだ。万事屋のガキ共はそれぞれの家にいたのにいきなりここにいて、総悟は俺と同じく森を探索していたらここに来た、ということの良いか？」

何とか復活した土方が状況をまとめると、3人はこっくりと頷いた。

「そうでさア。しかし、俺達3人は松陽先生に拾われやしたが、土方さんはあの2人に拾われたんですねィ」

ちらり、と沖田が視線を向けたのは、未だに泣きそうな銀時のことを必死に宥めている高杉と桂だった。

「ああ、まあな。・・・しかし、怪しいと思ってはいたが、奴ら幼馴染だったとはなア」

帰ったらキッチリと事情を聞かねェと、と呟く土方に、新八と神楽は何とも言えない表情になる。

「で、どうするんですかィ？・・・俺達はここに世話になることにしたんですがねィ」

「情報は必要だからなア・・・」

しかし、己をここまで連れて来た2人が銀時にかかりっぱなしなので、どうしたものかと土方は眉間にしわを寄せる。

「あの、お取り込み中失礼しますね」

そこに、いつの間にか近付いて来ていた松陽が声をかけてくる。

「晋助と小太郎が連れてきたそうですが、彼らともお知り合いのようですね」

「あ、ああ、土方十四郎という。・・・いきなり知らない土地に来ちまって呆然としてたトコをあの2人に連れて来られたんだ。・・・沖田とは同僚で、こっちのガキ2人は知り合いの店で働いてる従業員で顔見知りなんだ」

土方が答えると、松陽はニツコリと笑って頷いた。

「そうでしたか。私は吉田松陽と申します。彼らはここに滞在して頂くつもりでお誘いしたのですが、貴方も行く先が無いのでしたらこちらに滞在してはいかがですか？」

「・・・あ、ああ・・・そうさせて貰えると助かる」

「フフ、これから賑やかになりそうですね」

ニコニコと笑う松陽に毒気を抜かれてしまった土方は、苦笑をうかべて頭を下げた。

「よろしく頼む。吉田さん」

「あゝ、先生お帰りになってたんですねゝ倉庫のお掃除は終わりましたよゝ・・・って」

和やかな空気の中に入り込んで来た人物を振り返り土方は再び固まった。もちろん、相手も完全に動きが止まっている。

それを見ていた沖田と神楽と新八も、今回ばかりは情報処理能力が追いつかないのか固まってしまった。

「ああ、すみません山崎さん。助かります。・・・あれ？どうなさったんですか？山崎さん？」

「「山崎ッテメエもかああああッッ！！」」

「ひいひい！！？ふ、副長！？それに、沖田隊長！？」

思わず声を揃えて怒鳴った2人に、山崎はびくうツと身体を震わせて後退りをした。

「おやおや・・・山崎さんともお知り合いだったんですか？本当に奇遇ですねえ」

奇遇とかそうじゃなくて、ここまでくると作為的なものを感じる。というか、山崎が失踪したとか聞いてない。

「テメツ、いつの間に失踪してやがった！？」

「まったく、地味なのもいい加減にしなせエ！いなくなったのも気付かなかったじゃねエか！」

「そんな、酷い！！！そこは嘘でも心配してたとか言ってくださいよ！！なんでここで俺が責められてるんですか！！つか地味って言うな！！！」

散々な言われようにさめざめと泣く山崎に、神楽が鬱陶しそうに視線を向ける。

「ジミーはジミーネ。生まれた時から運命づけられてるアルヨ」

「エエッ！チャイナさんまで！！？」

「・・・ザキさん・・・可哀想に」

「新八君！！わかってくれるのは君だけだ！！」

ガバツと身を起こした山崎に、新八はガッチリと手を掴まれる。

「ぎ、ザキさん・・・」

「なんだい、新八君」

「地味が伝染ります、触らないでください」

「Σヒドッ！」

新八にまで素気無く扱われた山崎はその場に撃沈した。

「・・・ヒュー♪言いますねィ」

沖田が面白いものを見たと言わんばかりに口の端をつりあげると、新八はジトツと沖田を見つめた。

「これ以上影が薄くなるのは御免です。それでなくたって僕はメガ

ネよりも存在価値が低いとか思われてるんですから!!」

周りは憐れむような視線を向けてくるが、新八はいたって本気である。

「まあ、地味な連中の話なんてどうでもいいアルヨ」

「神楽ちゃんんんッ!?ひとくくりにしないでえええええ!!」

「まずは帰る方法を探すネ。これだけ人数がいれば何か良い案がうかぶかもしれないアル」

「つてか、無視いいいい!!!!?」

叫ぶ新八をまるっと無視して、神楽は土方と沖田に視線を向けた。

「・・・まあ、チャイナの言う通りだな。ここは意見を出し合うしかねエか」

「しょうがねエ・・・一時休戦だぜイ、チャイナ」

「フン、しょうがねエはこっちのセリフネ。まあ、でもよろしく頼むアル」

土方、沖田両名の言葉に、嫌々ながらも神楽は頷く。

「つーわけで、山崎、色々と情報は調べてんだろぅなア?」

「とっとと吐きやがれ、ザキ」

2人からのプレッシャーに山崎は思わず叫んだ。

「って言うか、この状況では俺の方が先輩なんですよ！！言い方ってもんがあるでしょうがあああ！！」

「「ウルセエ」」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

先程の勢いはどこへやら。2人からギロリと睨まれた山崎はガツクりと肩を落としたのだった。

どんなヤツでも子どもの頃は可愛い

「どうやら、積もるお話もあるようですし、とりあえず中に入りませんか？」

松陽の声に、ようやく自分達がどこで話をしていたのかを思い出した面々は、思わず辺りを見回した。

「先生、またこんなに連れて来たんですか・・・」

そこに、桂が歩み寄って来て松陽を見上げる。

「おや、それを言ったら小太郎や晋助だって1人連れて来たでしょう？」

「ちげーよ先生！怪しい奴だと思ったから先生に聞こうとしたんだ。なのに、結局滞在するって話になってるし・・・！」

ムスツとした表情で告げたのは高杉。

「そうでしたか、でも、山崎さんの知り合いならここでお世話しても良いでしょう？」

「・・・悪い奴じゃないなら・・・ここは先生の家だし・・・」

ボソボソと俯き加減に話す高杉の頭を、松陽は穏やかに微笑んで撫でた。

「・・・随分と信用されてんじゃねェか、山崎」

「一体、どんな手使って手懐けたんでイ」

「まあ、色々とはありますけどね・・・いたって単純ですよ」

コソコソと話す大人3人の傍に、銀時が近付いた。

「ねえ」

くい、と裾を引っ張られた山崎はそちらを振り返る。

「・・・ん？なんだい、銀時君」

「その人達、退の知り合いなら、元の世界に帰る方法見つかる？」

困ったような表情をうかべる銀時に、山崎は苦笑をうかべた。

「うーん、どうだろう？この人達もワケがわからないうちにこっちに来ちゃったみたいだからねー」

山崎は松陽達に違う世界から来たという説明をしているらしい。

天人という未知の生物が襲来して以来、不可思議な事に対する免疫がついているのだろう、怪しむ様子も見せず、松陽も子ども達も山崎の話をすっかり信じ込んでいるようだった。

そして銀時も多少警戒はしているようだが、山崎の知り合いであるということがわかったせい、土方達を怖がるそぶりは見せなかった。

その事にホッとしてるのに気付いた沖田は、微苦笑をうかべた。

「（いくら過去とはいっても、警戒されたり怖がられんのはさすがに傷つきますぜィ旦那・・・）」

「じゃあ、もうちょっと、ここにいる？」

「ッ！・・・~~~~！！！！」

幾分か嬉しそうに問うてくる銀色の子どもに、山崎はノックアウト寸前になってしまう。

「か・・・可愛いアル！！」

神楽もその銀時の様子に身悶えしている。

「・・・あの人にもこんな頃があったんだ・・・」

マダオの名をほしきままにするダメな大人代表の銀髪天パを思い出した新八は、なんでコレがああなるんだと頭を抱えなくなった。

先生のお話はちゃんと聞きましょう

その後、土方達は松陽が塾を開いている別棟に案内された。

「さあ、お土産ですよ。皆で仲良く分けなさい」

「「「はーい！」「」」

松陽から土産の草餅を受け取り、子ども達はしっかりと等分し始める。

「・・・エライもんでさア・・・誰一人我が儘言わねえなんて」

「吉田さん、アンタの教育の賜物ってヤツか」

「そんなことはありませんよ。あの子達は元よりイイ子なのです」

ニコニコと返して来る松陽に、土方達は苦笑をうかべた。

「うち2人は立派なテロリストになって、うち1人はマダオなんですが。」

とはいえ、子どもの時分の銀時や桂、高杉は確かに“イイ子”だった。

「よし、人数分に分けられたな？」

「ひい、ふう、みい・・・うん、全員分ある」

桂の確認に銀時が頷く。

「じゃあ、配るぜ？」

高杉がそう言って分けた皿を持ち、こちらに走り寄って来た。

「ん！」

差し出された土方は目を丸くした。

「え、あ？」

「お前達の方だ、ちゃんと人数分に分けたんだから食え」

ふんぞり返って言う高杉に、土方と沖田は互いに顔を見合わせた。

「遠慮する必要はありませんよ」

松陽も笑顔をうかべて草餅を食べるよう促す。

「しかし、これは吉田さんが子ども達にと・・・」

「ありがたく頂きますア」

固辞しようとした土方の脇で、沖田が高杉から皿を受け取る。

「って、おい！総悟！」

「土方さん……くれるってもんを断る方が失礼ですぜイ？」

「じゃあ、頂きます！」

「頂きますネ！」

ニヤリと笑う沖田の持つ皿から、神楽と新八が等分された草餅をそれぞれ取って口に放る。

「ホラ、土方さんの分ですぜイ」

いつもなら“ いらないなら俺が食べちまいますぜイ ” などと言って口に放ってしまうはずの沖田が、土方の分だと差し出してくる。

それは等分に分けて寄越した高杉達の想いを酌んでのことだろうと思った土方は、苦笑いをうかべて自分の分の草餅を受け取った。

「……頂きます」

口の中で咀嚼^{そしゃく}する間、高杉達の視線が痛いほどに突き刺さる。なんだと顔を向ければ、パツと視線を逸らす。

どうやら、固辞しようとした己の反応が気になるらしい。そう結論した土方は、フツと笑った。

「……美味かった。ご馳走様」

その瞬間、高杉達がホツとした様子を見せる。土方は自分の勘が外れなかったことに安堵する。

「本当に、イイ子達でさア・・・どこの誰とも知らねェ俺達の分までしっかり等分してくれるたア、ウチの連中に爪の垢を煎じて飲ませてやりてエですネイ」

「・・・フフ、褒めてくださりありがとうございます。この子達は私の自慢なのですよ・・・この子達の“未来”^{future}を見ることが私の願いなんです」

沖田が手放しで褒めると、松陽は本当に嬉しそうに笑った。

こんな師がいたのなら、なぜ桂と高杉はテロリストなどになってしまったのか。

銀時にしても、あのような場所で胡散臭い万事屋などをやっているのは、どうにもこの状況から繋がらない。

「松陽先生」

子ども達が松陽に群がる。

「ねえ、先生、今日は何の勉強をするの？」

「そうですねえ・・・皆、教本は持ってきましたか？」

「」「はーい！」「」

それぞれがおもむろに取り出した教本を見て、新八と神楽がハツとする。それは、紅桜の事件の際、高杉と桂がそれぞれ持っていた本そのものだと理解したからだ。

思い出は大切にするものだ、と高杉は嘯うそいていたが、事実それは師から貰った大切なものだったのだ。

「神楽ちゃんと新八君でしたね、貴方達も一緒に勉強をしてみませんか？」

教本をじっと見ていた2人に気付いた松陽にニコニコと問われ、2人はおずおずと頷いた。

どうしても、その中身が知りたかったのだ。

「では誰か、教本をこの2人に見せてあげてください」

「・・・新八、だったな。俺が見せてやろう」

グイ、と桂に腕を引かれ、新八は大人しく桂の隣に座る。

「・・・・・・・・教本、見せて欲しいアル」

その様子を見ていた神楽は思い切って銀時の前に立ち、そう頼んだ。スッと神楽を見上げた銀時は、一瞬キョトンとし、その後ズルズルと横にずれた。そこに座れ、ということらしい。神楽は破顔して銀時の隣に座った。

それを優しげな表情で見守っていた松陽は、パンパンと手を叩いた。

「それでは、授業を始めるとしましょう。土方さんと沖田さんはどうぞ後ろで見学をしていてくださいね」

松陽に勧められるまま、まるで父兄参観だなど思いながら土方は銀時や桂、高杉を眺める。

松陽の授業はとてもわかりやすく、そして、土方達にも為になるようなものだった。

「・・・それでは、多数の部隊が一ヶ所を集中攻撃してきたとしましょう。このような場合はどう対処したらいいでしょうか?・・・
小太郎」

「はい!その場合は順次後退し、戦略的撤退を選択します」

「ちげエよ、そこは遊撃隊を使って挟み打ちだろ?」

桂の答えに、高杉が訂正を入れる。

「それでは多くの犠牲者が出る!」

「死を恐れて何が侍だ?」

バチバチと火花を散らす2人の主張はまるで正反対。どうまとめるのか、と土方は松陽を見つめる。

「ケンカはいけませんよ、晋助、小太郎。・・・私は2人の戦略はどちらも有りだと思います。ただ、それは状況によって柔軟に考え、変えていかなければなりません。もし、味方が圧された状況のまま

挟み打ちをしたとしましょう。そして敵を前方から迎え撃っていた部隊が潰れたら、どうなりますか？晋助」

「・・・挟み打ちが・・・成立しません」

「そうですね。・・・逆に、あと一步というところまで追いつめていて、撤退を選択するのは正解でしょうか？小太郎」

「・・・いえ、その場合は挟み打ちにし、一網打尽にする方が有効と考えます」

「その通りです。・・・己の主張を通すことだけでなく、状況をいかに判断するかが大切になって来るということですね」

子ども達に考えさせ、答えを自ら見つけさせる。松陽の授業はこうして進んで行った。

「・・・あの人が、今の桂と高杉の元を作ったんですねィ」

「ああ」

松陽を見つめながら呟く沖田に、土方は頷く。

土方自身は通ったことはないが、通っていた者から聞くに“融通がきかない”ただ、藩のためになることだけを教える藩校と違い、松陽の教えは生活の知恵のようなものから、先程のような兵法までと多岐にわたっている。

「一度じっくり、教えを請うてみたいもんだな」

真選組の頭脳として松陽の教えには興味があつた。それに、現代に戻り桂や高杉を捕らえる一助になるのではと思ったのだ。

「うわー、こんな時でも仕事のコトを考えてるんですかイ？ どんだけ仕事人間なんでイ」

「・・・ほっとけ」

棒読みのセリフで突っ込んでくる沖田を軽くないなし、土方は銀時に視線を移した。

そこには刀を抱きしめ、明らかに眠そうにしている子どもがいた。

隣に神楽がいるためか何とか目を開けようと必死になっているものの、その瞳は例の“死んだ魚のような目”以上にとろんとしている。

「・・・野郎、あの様子じゃ、いつも寝てやがるな」

「あゝ、旦那、眠そうですねィ」

呆れる土方と、クツクツ笑う沖田。

確かに松陽の声は穏やかで心地よく、しかも陽射しがあたりポカポカと温かいあの場所に座っていれば、眠くもなるのだろう。

「・・・では、今日はここまでにしましょう」

松陽の授業を終了する言葉と共に子ども達のおしゃべりが始まり、教室はにわかに騒がしくなる。

「おい、銀時！・・・どうやら今日は眠らなかったみたいだな」

銀時の傍にやって来た高杉がチラリと神楽を見た。

「・・・いつもは寝てるアルか？」

神楽が首を傾げれば、高杉はムスツとして頷く。

「まったく、先生の授業に興味が無いわけではあるまいに・・・いつもコイツは後で先生と授業のおさらいをしているんだ」

更に新八を引っ張って銀時の元に来た桂がそう告げると、新八と神楽はくすくすと笑った。

「・・・だって、眠くなるんだもん。・・・それに、聞きたいことがあったら後で聞きなさいって、松陽先生も言ってた」

高杉と桂が来てハッキリと目が覚めたらしい銀時が言い訳じみたものをすれば、その2人から呆れたような視線を向けられた。

「・・・まったく。先生と一緒に住んでるからって暢気のんきだな」

「松陽先生と話すっていったら自然とそういう話になるだけだもん」

桂の言葉に、ぷくつとふくれる銀時に、神楽と新八は静かに悶えた。

― 銀（さん／ちゃん）、可愛すぎる！！！！

それを遠目で見ながら、土方と沖田も銀時の可愛さに思わず口元が歪んだ。

「旦那ア・・・可愛すぎでさア」

「アレを大人のアイツがやったら気色悪りいだけだっつのに、子どもってだけで破壊力抜群じゃねエか・・・」

「ですよー」

「「うおあッ!!?」」

ぬ、と顔を出した山崎に、土方と沖田はギョツとして身を引いた。

「・・・登場はアレだけ派手だったのに途中から影薄くって・・・はあ、やっぱり俺って地味キャラなんですかねエ、副長」

「・・・俺に聞くな」

「なあ、ザキ。話を聞いてる限りじゃ旦那は松陽先生と暮らしてるってコトになってるねイ」

「はい、そうですよ。・・・どういう事情かは聞けてないんですが、旦那は孤児だったらしくて、先生が突然連れて来たんだそうです」

「極度の人間不信だったって、松陽先生は言っていましたねイ」

「・・・アイツがか？」

土方が問えば、沖田と山崎はこっくりと頷いた。

「確かに出会った当初は、松陽先生の影に隠れたまんまで出て来てくれませんでしたねィ」

「俺も沖田隊長とほぼ同じですね、すごい警戒されてたんですが、けどちょっとしたことでも仲良くなってその後は懐いてくれましたが」
現代の銀時からは想像も出来ないくらいに、この頃の銀時はデリケートだったらしい。

「後で、吉田さんにそれとなく訊いてみるか・・・」

そう呟くと、土方は再び銀時達の様子を窺う。そこには、子ども達の弾けんばかりの笑顔があふれていた。

大人の氣遣いと子どもの氣遣い

日が暮れ出すと、子ども達は1人また1人と家に帰って行く。

「じゃあな」

「また明日」

別れの言葉を口にして、名残惜しそうに松陽宅を去る。

彼等を見送る銀時の背中がとても寂しそうで、土方達は何とも言えない思いになる。

「若様あ」

高杉家に仕えているらしい女中が高杉を迎えに来る。

「お咲か・・・迎えは要らないって、いつも言ってるだろ？」

お咲と呼ばれた女中は、困ったように笑う。

「申し訳ございません。ですが、旦那様が急遽お戻りになられるそうで」

「・・・父上が？」

訝しげに訊ねる高杉に、土方は首を傾げた。

この年代の子どもならば、父親が帰って来ると言われれば普通喜ぶのではないのだろうか。

「はい」

頷くお咲を見て、高杉は不安そうに松陽を見上げた。

「・・・先生」

「京から戻られるのですか」

わずかに、松陽の瞳が揺れる。

京で長州藩と朝廷・幕府との交渉にあたっている高杉の父が戻って来るということは、良くも悪くも何らかの動きがあったということだ。

「先生にも明朝お伺いすると伝えて欲しいとのことでした」

「わかりました・・・お待ちしているとお伝えください」

「かしこまりました」

深々と頭を下げたお咲に連れられ、高杉は複雑な表情をうかべたまま帰路についた。

「先生、高杉の父上が京から戻られるというのは、良い知らせなのでしょうか？悪い知らせなのでしょうか？」

桂が松陽に訊ねる。

「それは、お話を伺ってみたいとわかりませんね。ですが・・・樂觀視するわけにはいかなそうです」

松陽の中では既に高杉の父がもたらす情報がどのようなものか見当がついているらしい。

桂はそんな松陽の表情を読まんとしてじっと見つめている。

「・・・小太郎、もうすぐ日が沈むよ？」

不意に、銀時が桂に声をかけた。

「え、あ、本当だ・・・じゃあ、先生また明日！」

「ええ、また明日」

ハッとして手を振って踵を返した桂を、松陽はにこやかに見送った。

「・・・松陽先生、明日は千客万来の日？」

松陽の着物の袖をクン、と銀時が引く。

「そう、ですね・・・お客様がたくさん来るかもしれませんね」

「じゃあ・・・」

「・・・お客様とは別棟で会います。ですから、銀時は母屋で皆さんと一緒にいなさい」

松陽に客が来ると決まってふらりとどこかへ行ってしまう銀時だが、同居人がこれだけいれば安心だろう。

そう思って松陽が言えば、銀時は目を丸くして土方達を振り返った。

「そっか、今回は退達がいるんだ・・・」

どうやら客が来たら姿を見せないようにしなければ、という彼なりのルールが頭にあり土方達の存在が頭から飛んでいたようだった。

「こういうわけなので、明朝は銀時と一緒に母屋にこもって頂けますか？」

「・・・ああ、大事な話なんだろう？まったくもって問題ねエよ、大人しくしてる」

松陽が申し訳なさそうに言うと、土方が代表して答えた。

「助かります・・・少々難しい話になると思いますので、他の世界の方といえども耳に入れるわけにはいかないんです」

困ったように笑って松陽は告げる。しかも、山崎の嘘を信じているような発言だった。

これだけの人物が、こんなにも簡単に他の世界から来たただなどという与太話を信じるだろうかと土方は訝しんだ。

もしかしたら、松陽は信じたフリをしてきているのかもしれない、と思い至る。

「・・・吉田さん、なるべくアンタには迷惑をかけないようにする。あまり、気は使わないでくれ。して欲しいことやしたらいけないことがあったら言ってもらえると、こっちも助かる」

郷に入れば郷に従え、つまりはそういうことだ。ここでの決まりごとさえ守っていれば、おおよその面倒事は避けられる。

「わかりました。その話は夕飯の時に。・・・じゃあ準備をしますので、母屋にあがっていてください」

そう言い置いて松陽は母屋に入っていった。

「あ、手伝いますよ」

その松陽の後を山崎が追う。

「・・・あ、えーと」

新八が気まずそうに銀時を見降ろした。松陽や山崎という緩衝材かんしょうざいがいなくなってしまう、また、銀時に警戒されるのではないかと危惧したのだ。

「良かったら、夕飯出来るまで母屋案内するけど・・・」

そんな銀時の言葉に、新八が危惧したことも杞憂だったと知る。

「じゃあ、お願いしまさア」

ニコニコと笑って沖田が銀時の視線に合わせるようにしゃがみ込めば、銀時はコクリと頷いた。

過去を知るには覚悟が必要

松陽の家は思いの外広かった。が、そのほとんどは書庫と化していた。

「スゲーな・・・どんだけの資料があるんだ？」

土方が素直に感心して呟けば、銀時はスイ、と彼を見上げた。

「先生、気になったものは全部手に入れてるから、本人でもどれだけあるのかわからないって言ってた」

「・・・マジでか」

神楽が訊ねると、銀時はコクリと頷く。

「えっと、銀さ・・・銀時君は皆が帰った後はいつも何をしてるんですか？」

「オマエ達が来る前は、本読んだり先生と話してたり剣術の稽古をつけてもらったり・・・いろいろ」

新八の問いに銀時はサラリと答える。

「剣は、松陽先生に教えてもらってるんですかい？」

「うん、授業でもやってるけど・・・それじゃ、本気出せないから」

他の子ども達では銀時の相手にならない。良い所まで行くのは高杉や桂ぐらいだと答える銀時に、沖田は目を細めた。

「へえ、1度見てみたいですねィ」

「イィよ、道場空いてるし、今から行こうよ」

すんなりと了承して提案した銀時に、全員が目を剥いた。

―あのやる気ゼロのマダオが、ちっちゃな頃はこんなにイィ子でやる気のある子だったなんて!!!!

全員がそんな感想を抱いて感激しているとは知らず、銀時は不思議そうに彼等を見つめる。

「・・・ねえ、行くの？行かないの？」

「い、行きます！」

「うん、行くアル!!」

調子が崩れてしまう程のギャップに戸惑ってばかりだが、この状況を楽しむことにしたらしい子ども達はさっさと銀時の手を取り、道場へと連れ立って行く。

が、手を掴まれた際に銀時がわずかに怯える様子を見せた。子ども達は気付かなかったようだが、土方と沖田は気付いていた。

「・・・まだ、警戒は解けてねェか」

「警戒っていうよりも、本能に近いんじゃないですかイ？・・・俺達だけじゃなく、多分、塾の子ども達にも・・・壁を作ってるように見えまさら」

「壁、ねエ・・・野郎、なんであんなに怯えてんだ？」

「・・・本人に聞いても意味無い、でしょうねィ。無自覚みてーだし」

「だろーな」

子どもの頃の銀時の周りを囲むものは優しいものばかりだと思っただが、実際はそうでもないのかもしれない。

土方は肩を竦め、沖田と共に道場へと急いだ。

＊

道場では既に銀時と新八が竹刀を持って対峙していた。

「チャイナ、テメエはやらねエのかイ？」

「私は刀は使わないアル。だから、駄目ネ」

神楽の答えに沖田はへエ、と呟く。

「何ネ。何か文句あるか、サドヤロー」

ギロリと睨んでくる神楽に、沖田は肩を竦めた。

「いや、テメエの事だから、傘でも体術でも何でも使って旦那に相手をしてもらうんじゃないかと思ったんだがねィ」

「・・・今の銀ちゃんはちっちゃいアル」

大人の銀時であればいざ知らず、子どもの銀時に夜兎の己がかかっていけば、酷い怪我をさせるかもしれない。そんな不安から神楽は銀時に絡むのを諦めたのだ。

竹刀で打ち合う銀時と新八を羨ましそうに見つめながら、神楽は言いきった。

「チャイナの心配は杞憂かもしれないぞ」

神楽と沖田の会話をそれとなく耳にしていた土方が、アレを見ると銀時達を顎でしゃくった。

「・・・え？」

「へエ・・・言うだけはありませんねィ」

そこには決まった型は無いものの、一通り道場剣術をこなしているハズの新八をガンガンに攻めている銀時の姿があった。

「ナルホド・・・強エな。他のガキ共じゃ相手にならねエワケだ。・・・だが、吉田さんに剣術を習ってるって言ってたわりには型がねエし、ハチャメチャだな」

思わず納得した土方だったが、その型の無い剣術に首を傾げた。

「それは、銀時が我流で刀を振り回している時期が長かったからですよ」

不意に、落ち着いた声が耳元で聞こえ、土方はギョツとして後ろを振り向いた。

「うおっ!?!?・・・よ、吉田さん!?!?」

「あ、松陽先生、いたんですかい」

「先生、よくここがわかったアルな」

沖田や神楽も内心驚きながらも松陽に歩み寄る。

「ええ、音が聞こえてましたからね。・・・夕飯の準備ができたので呼びに来たんですよ」

ニコリと笑う松陽に、土方と沖田は舌を巻いた。

「(・・・気配に全く気付かなかった)」

「(・・・俺や土方のヤローも気付かねェくらい自然に溶け込むなんて、さすが旦那の師匠でさア)」

「先生、なんで銀ちゃんは我流で刀を振り回してたネ?」

神楽は先程の松陽の言葉に引っかかりを覚えて、疑問を口にした。

「あの子は・・・私に拾われるまで、たった1人で戦場で屍の持つ食料を漁って命を繋いでいたんです。己の身を守るために屍から奪

った刀を振り回していたんですよ。あのように幼い子どもが鬼と呼ばれる程にね」

松陽が告げた銀時の過去に、神楽だけでなく土方や沖田も目を丸くした。

「鬼、ですかイ？」

「ええ、“屍を喰らう鬼がいる”という噂を聞いて興味本位で戦場に行ってみたんですがね・・・いたのはあの子1人でした。屍の山に腰掛けてそれらが持っていただろう食料を口にして・・・最初は警戒心故^{ゆえ}かろくに近づけもしませんでした^{たやす}が、存外^{ぞんがい}聡い子でしたから説得は容易^{たやす}かったですよ」

つい先ほど会ったばかりの自分達に、なぜこうも正直に松陽は話してくれるのか。

その質問を土方がぶつければ、松陽はクスリと笑った。

「貴方達は、初見で銀時を拒絶しませんでした。異世界ではあのよ
うな髪色は珍しくないでしょうが、あの子にとっては奇跡に近い
行動なんですよ。だから、貴方達には知っていてももらいたいと思っ
たんです」

「それって・・・」

「まあ、この辺りの者達でそんなことを言う大人はおりませんが、
中には天人の間者だという者や、鬼だ妖怪だという迷信深い者もお
りますからね。・・・だから、銀時は私に客人が来る時はどこかへ
と身を隠してしまいます。1度“そういうこと”があったので、ね」

そう言って悲しそうに笑う松陽に、何も言うことが出来ずに3人は黙り込んでしまった。

「・・・松陽先生？」

いつの間にか新八に膝をつかせていた銀時が松陽に走り寄る。

「銀時、夕飯の準備が終わりましたよ。さあ、行きましょう」

悲しそうな笑みを優しげな笑みに変えて手を差し伸べる松陽。銀時はコクンと頷いて自然にその手に自分の手を乗せる。

さすがの銀時も松陽にだけは警戒心を抱いていないらしい。羨ましいと思う反面、やはりと思う。

「ここで・・・旦那の人生は松陽先生によって、180度変わったんですねィ」

「の、ようだな」

尚更、大人の銀時の様子は解せない。

「今の旦那に至るまでに、もう一度、人生180度変わるような出来事があったってことですかねィ」

「かも、しれねェな」

だとしたら、嫌な予感がいや増す。そうそう滅多なコトで人生が2度も180度変わるなんて事はないだろう。

「・・・土方さん、さっきから俺の言葉に頷いてるだけですゼイ？マヨ切れですかイ？」

「・・・考え事だ、ほっとけ」

フィ、と土方は沖田から顔を背け、ゆっくりと松陽達の後を追うように歩き出す。

「まあた、旦那の過去ってヤツを知っちゃってやり辛くなるとか、難しく考えてやがるねィ、ありゃア」

「マヨのコトなんてこの際どうでもいいネ、ただ、元の時代に帰った時に銀ちゃんに過去について何か言うつもりなら、容赦はしないアル」

鋭い殺気を向けてくる神楽に、沖田は口の端をあげた。

「わかってらア、俺だって旦那に嫌われんのはごめんでィ」

そう言っつて沖田は神楽に背を向ける。

「そっちのメガネ起こして、さっさと来なア。飯、食いっぱぐれるゼィ」

「言われなくてもそうするアル！！」

神楽は叫び、荒く息をつく新八の傍に走り寄った。

「新八ィ、大丈夫アルか？」

「・・・う、うん。大丈夫・・・あゝあ。銀さん、僕よりひと回り
以上も小さいのに、押し負けちゃったよ」

項垂れた新八に、神楽は自分のことのように誇らしげに胸を張った。

「当たり前ネ、銀ちゃんは最強アル。駄メガネが勝てるわけないネ。
身の程知れヨ」

「・・・事実だけど、その言い方すごい傷つくんですけどオオオ
オ!!!!」

道場に新八の叫びがこだました。

先生の観察眼（かんさつがん）をなめちゃいけません

「いただきますーす！」

「いただきます」

用意されたお膳を前にして新八と神楽が手を合わせると、銀時も静かにそう口にする。

「どうぞ、召し上がれ」

ニコニコと松陽が言えば、子ども達は表情を輝かせ、料理に箸をつけた。

「いただきます」

「いただきやす」

土方と沖田も手を合わせてから、料理に箸を伸ばす。

「・・・マヨ、マヨネーズはかけないアルか？」

いつもマヨネーズをかけているところしか見ていなかった神楽が不思議そうに隣の土方を見上げた。

「・・・Myマヨ忘れたんだよ・・・ここにゃ、ねーだろうが」

「マヨラーらしからぬ失態ですねィ、土方さん」

ニヤニヤと沖田が意地の悪い笑みをうかべる。

「うるせッ」

「あゝ、副長。マヨならありますよ」

「「「えっ！」」」

「あ、あんのか！？この時だッ・・・世界に！？」

興奮のあまり思わず身を乗り出して“この時代”と言いつくになり慌てて言い変えた土方に、山崎は苦笑した。

「ないですよ。でも、作れますから」

「あ・・・そうか・・・マヨの材料はあるのか・・・」

呆けたように腰を下ろした土方の前に、山崎は器に入った自家製マヨネーズを置く。

「まあ、自家製なんでちよつと味は落ちてますしマヨネーズ用の入れ物なんてのもないので、これで我慢してください」

「山崎っ！・・・いや、これで充分だ・・・！」

感激した様子の土方に、松陽はクツクツと笑った。

「まよねーずといいましたっけ。少し舐めさせてもらったんですが美味しかったですよ。異世界ではこのような不思議な食べ物がたく

さんあるのでしょうね」

「そうですね、いろんなのがありますぜい。土方さんみたいのは行き過ぎですがねい、チョコレートパフェなんてのを好んで食べる人がいますア」

「ちょ、こ？ぱふえ？？？」

箸を止めて銀時が首を傾げる。本能で甘いモノの名前だと気付いたのだろうか。

「あまーいお菓子でさア。きっと、銀時も気に入ると思いますぜい」

沖田が言えば、銀時の目がきらんと輝いた。

「甘い物？・・・それって、どんなの？」

「こう、縦長のガラスの器に・・・」

「ガラスって何？」

ガラスもわからない銀時に、沖田は困ったように眉根を寄せた。元々説明などめんどくさくて苦手だというのに、どう言ったらいいのかわからなかったのだ。

「“ぎやまん”だ。それでわからなけりや“ビードロ”か？」

「その2つなら知ってる」

土方が補足を入れれば、銀時は納得したような声をあげた。

一瞬、沖田がムツとするのを視界に入れた土方だが、説明を待つ銀時を示す。

土方を睨むのを諦めた沖田は、再び説明を始めた。

「・・・まあ、その器にたっぷり生クリームやチョコレートやアイスっていうものを綺麗に盛り付けて食べるんですぜイ」

「なんか、よくわかんないけど・・・美味しそう！」

「ふふ、銀時は甘いものが好きですからね」

「うん」

「・・・銀ちゃんはどんな甘いのが好きネ？」

「ん？・・・えっと、お団子とか饅頭とか、あ、この間先生のお客が持って来た“かすてら”だっけ？アレ、美味しかった」

「ああ、長崎からの客人ですね」

萩と長崎は江戸に比べれば近い方だが、それでも車や電車もないこの時代ではかなりの労力が必要だろう。そんな所からわざわざ松陽を訊ねてくる客人達。

吉田松陽とは一体この時代にどんな役割を果たしていたのか。

思わず土方が仕事モードになりかけた時だった。

「ねえ、それ・・・甘いの？」

銀時が不意に未知の食物に興味を向けてきた。

「・・・いや、甘くはねエが・・・食ってみるか？」

土方はマヨネーズの入った器を銀時に向かって差し出す。

銀時は少し箸ですくうと口の中に入れ、文字通り飛びあがった。

「~~~~ッ！すっぱい！」

「・・・まあ、こつちの世界じゃもうちよつと酸味は少ねえが・・・
こんなもんだぞ」

「あはは、材料が卵と酢と油と塩ですからねエ。コシヨウがあれば
もうちよつと味が締まるんですけど」

「・・・まずくはない、けど・・・俺、あんまり好きじゃない」

一応土方に気を使ったのかまずくはないと言うものの、他のものを
口の中に入れて後味をなくそうとしているのを見れば、口に合わな
かったのは確かだ。が、

「ま、まあ・・・味の好みは人それぞれだからな」

さすがに土方も子ども相手にムキにはなれず、大人の対応をするし
かなかった。

＊

食事を終わると松陽は子ども達を外に出し、土方と沖田、そして山崎と向かい合った。

「山崎さんがいらした時から思っていたことですが、皆さんの世界はこちらの世界に比べて随分と技術が発達しているようですね」

話を切り出した松陽に土方は身を固くし、沖田は表情を強張らせた。

その様子を見た松陽は苦笑をうかべた。

「・・・料理一つにとっても、食材や調味料などに随分違いがあるようですし・・・もしかしたら、天人の技術に似通ったものもあるのかと思います」

「・・・だとしたら、どうするんだ？」

「お尋ねしたいことがあります。もちろん、答えられない時は答えなくて構いません」

「・・・ああ」

「皆さんの世界に、天人はいるのですか？」

「・・・いる」

少し考えてから頷く土方に、松陽は目を細める。

「では、その技術も使っている？」

「・・・使ってますぜィ、便利なもんでさァ」

「俺達の世界にある技術のほとんどは天人のモンだ」

「・・・ふむ。では・・・刀を振るうだけの侍が、黒い筒状の武器や空飛ぶ船などに勝てると思いますか？」

それが本題か。土方は眉間に深くしわを寄せた。

「・・・答えられねェな」

「未来を、変えてしまいかねないからですか？」

松陽の問いにも土方達は表情を変えない。

「・・・なかなか、皆さん手強いですね」

くつりと笑う松陽に、沖田が口の端をあげた。

「本当に知りたきゃ、メガネやチャイナに聞きゃイイ話でさァ。俺達より余程簡単に情報を手に入れられやすからねィ・・・松陽先生はそれをしねえ。つまり、俺達が簡単に話すかどうかを探ったってコトじゃねーですかィ？」

「まあ、そこまで気づかれているなら誤魔化す必要はありませんが・・・私は異世界の話は嘘で皆さんは未来から来た、そう思っています・・・今の質問でそれは確信に変わりました」

「・・・どこで、そう思った？」

土方が問えば、松陽は微笑んだまま答えた。

「皆さんが銀時を見る時の目です。あれは既知のものを見る目でした」

その答えに、多少自覚のあった3人はギクリとした。

「・・・最初はこの世界には珍しく、貴方達の世界ではよく見る“色”だからかとも思いましたが、銀時や小太郎、晋助へ微妙に他とは違う視線を向けているので、異世界というよりも未来の彼等を知っているからこそそのものではないのかと結論しました」

「・・・そんな、荒唐無稽こうとうむけいな話を」

「異世界からやって来たという話も、充分荒唐無稽ですよ」

クスクスと松陽に笑われ、土方は苦虫を噛み潰したような表情をうかべる。

「こう見えても考え方は柔軟な方だと思ってますよ。あの子を拾った時も周りには随分と変わり者扱いをされたものです。“鬼”を拾うなんて、とね」

「・・・“鬼”か。ただのガキじゃねえか」

「まったくです。・・・幸いにもこの辺りの人達はどちらかというと大らかな性格の方が多くて、銀時も他の子ども達同様可愛がってくれますが・・・他の排他的な地ではあの子は生き難いでしょう」

銀時の容貌はこの時代では異端。それを改めて松陽の口から聞かされるとうり切れない思いになる。

「・・・松陽先生は、“あの人”の未来が知りたいですかイ？」

堪らず沖田が口にした質問に、松陽は苦笑をうかべた。

本音

「・・・あの子の未来、ですか。知りたいような、知りたくないような・・・ですね」

曖昧な答えは、そのまま彼の心境なのだろう。

遠回しに未来から来たことを肯定され、しかも銀時の未来を知りたいかと訊ねられればそんな心境になるのは当然と言えた。

「総悟、吉田さんを困らせるんじゃないエ」

「・・・わかってまさア。すいやせん、混乱させるようなこと、言っちゃまって」

土方が注意すれば、沖田も自覚があったのか素直に頭を下げた。

「あ、いえ・・・謝らないください。知りたいと思う気持ちがあるのは確かですから。・・・ですが、私が未来を知っても良いものかどうか・・・」

松陽に言われて、初めて3人はその事に思い至った。

「・・・確かに、俺達が過去に來ている時点で過去が変わってる可能性は高い。これ以上余計な真似はしない方が良さそうだな」

「・・・タイムパラドックスってヤツですねィ」

「・・・たい、むばら？」

松陽が首を傾げる。それを見た山崎が口を開いた。

「あ、えーと・・・例えばですけど。自分が生まれる前の両親に会って、何らかの理由で殺したとしますよね？」

「え、ええ・・・」

物騒な例え話に困惑しているものの松陽は頷く。

「そうすると、自分が生まれなくなって消えてしまうっていう・・・まあ、その場合両親を殺した自分の存在を消すことになるので、両親を殺したこと自体が有り得なくなるっていう矛盾が起こるわけですけど・・・つまり、直接歴史に介入した場合に起こる不都合ってヤツです」

「ああ、ナルホド・・・難しいんですね」

「まあ、タイムトラベルなんてのは、作り話だと思ってたんだがな・・・」

納得した松陽に、土方は苦い表情をうかべた。が、

「でも、実際に過去に来ちゃってますしねィ」

などと言って肩を竦める沖田に、だよなァ、とガックリと肩を落とす。

「・・・原因はわからないんですか？」

松陽の問いに、3人はタイムトラベルをする直前の事を思い出そうとする。

「・・・俺は・・・見回りのために町外れの林ン中を歩いていて、それで・・・あれ？どうしたんだったか・・・」

「いやだなァ、土方さん。もうボケが始まったんですかィ？・・・元の時代に帰ったら、即刻副長の座を退くのをオススメしますぜィ？」

「あゝァゝ！？ボケてないわ！！・・・お前こそどうなんだ？」

「俺は・・・空を見上げたら気を失って、気付いたら万事屋のガキ共に囲まれてましたねィ」

「チッ、参考になりやしねェ・・・山崎、テメェはどうだ？」

「えーと・・・タイムトラベルする直前、白い人を見ましたよ」

「白い、人だァ？」

土方が訝しげに問う。

「ええ、監察の仕事をしてた時に目の前に白い人が現れて・・・気づいたら、この村塾の門の前に倒れてたっていう感じです」

「門の前か・・・全員、この付近に飛ばされて来たってのが作為的なものを感じるな」

「確かにそうですね・・・普段から私や銀時、晋助達が行動する範

囲内で皆さん方を見つけていますからね」

いくらなんでも集中しすぎだ。山崎の見た白い人というのも気になるし、これは新八や神楽にも聞くべきかと土方が考えを巡らせた時だった。

「あのく……僕も見ました、白い人」

遠慮がちに襖が開けられ、そこから新八が顔を出して恐る恐る告げた。

どうやら、先程から聞き耳を立てていたらしい。

「……お前も見たのか？」

「あ、はい……最初は夢でも見たんだろうって思ってた気になかったんですけど」

「私も見たヨ、白い人って言うより白い光みたいな感じネ」

新八に続いて神楽も顔を出し、そのまま室内に入ってくる。

その後ろに銀時がついてきたのを見て、松陽は苦笑した。

「おやおや、外に出した意味がありませんでしたね」

「ごめん、松陽先生。……でも、気になって」

「そうですね……私も専門外ですし、どうやったら皆さんが元の時代に帰れるのかもわかりません。……今は、未来から来たとい

うコトはここににいる者だけの秘密ということにしましょう」

松陽の言葉に頷き、土方は神楽と新八を手招いた。

「まあ、聞いていたならわかると思うが、タイムパラドックスの問題もある。あまり未来の事は喋るなよ？」

「わかりました」

「・・・わかったアル」

子ども達は頷き、銀時をちらりと振り返る。

その視線を受け、きょんとしたまま首を傾げる銀時。

「何？」

「あ、いえ・・・決してマダオにならないように矯正しようとか思
ってませんから!!」

「そうネ! マダオの道にまっしぐらでも、私達は温かく見守るアル
!」

「「・・・まだお？」」

松陽や銀時はわからないようだったが、土方達3人のツボに2人の
セリフは直撃だった。

「プッ！」

「ブハッ・・・ククク・・・」

「あははははッ！」

肩を震わせる土方に、腹を抱える沖田。更にはバンバンと畳を叩いて笑う山崎といった面々に、さすがの銀時も“マダオ”という言葉が悪口に近い言葉だと感じたらしい。

「まだおってなんだよ！！人がわからないと思って！！」

腹を立てた様子で土方を睨むと、銀時は容赦なくその背中を蹴り飛ばす。

「のわっ!？」

「!?!?・・・こら！銀時!?!?何やってるんです!?!」

まさかの銀時の行動に土方は前のめりになり、松陽は仰天して声を上げた。

「フン!・・・コイツ等が悪いんだ!」

プイッと顔を背けた銀時に、松陽は途方に暮れたような表情をうかべた。

「・・・だからと言って、土方さんの背中を蹴り飛ばすなんて・・・お前らしくありませんね」

元々めんどくさがりで、攻撃的な性格をしているわけでもない銀時がこんなことをした理由がわからない。

しかも、他にも笑っている人間はいて、そもそもマダオと言い出したのは子ども達の方だ。なのに、銀時は迷うことなく土方を狙った。

「だって・・・ずっとしかめっ面してたのに・・・そのコトでだけ笑った!」

確かにこちらに来てから、土方はほとんど表情を動かすことはしなかった。苦笑をうかべることは何度かあったが、ここまで笑ったのは初めてだろう。

しかし問題は、銀時が土方をずっと観察していなければそれに気づかなかっただろうということだ。

「・・・俺を、見張ってたのか?」

「だって!・・・お前だけ違うんだもん!」

「銀時?・・・何が違うんです?」

松陽は銀時を宥めるように肩に手を置いて訊ねる。

「俺を見る目・・・」

ボソリと答える銀時に、松陽は首を傾げた。

己も気になって見てはいたが敵意は感じなかったし、これ程銀時が気にするような視線は向けていなかった。

「・・・物足りないっていう目、どうしてって・・・ずっと視線で

訊かれてるみたいで、気になるに決まってるだろ！」

「・・・あ」

自覚はあった。

初対面やその次の邂逅でも刀を合わせ、その後は顔を合わせれば厭味の応酬。稀に手を貸して貰うこともあったがそれは彼の気まぐれで。だけどその時はとても頼もしくて。

彼の魂はその死んだ魚のような目で誤魔化されていたが、いつだって輝いていた。

だから、目の前にいるのは過去の銀時だと頭ではわかっているが、自分達を見て怯える姿に落胆し、物足りなさを感じていたのは確かだった。

「土方さん？」

松陽が視線で問うてくる。

「・・・お前の言う通りだ。・・・俺ア、頭じゃわかってるが、どうしても未来のお前と今のお前を比べちまう」

土方の答えに銀時は目を丸くした。

「未来の俺って・・・どんなヤツなの？」

未来の事は答えられないと誤魔化することも可能だったが、土方は言い訳をするように告げた。

「・・・未来のお前は・・・自分の命を省みず誰かを守るために刀を振るう男だ」

絶対に口が裂けても現在の銀時に面と向かって言うつもりはないが、過去の銀時になら。

そう思いながら土方は続けた。

「・・・戦っている時のお前は、俺の目標とする侍そのものだ」

土方の言葉に、万事屋の子ども達も沖田も山崎も、そんなことを思っていたのかと驚きを隠せなかった。

未来への希望と不安（前書き）

銀さん達の年齢については明らかにされてないですが・・・
話の都合上、

銀さん↓27 土方さん↓25

で捏造しておきます。ご理解ください。

未来への希望と不安

その土方の言葉を聞いた松陽はゆるりと口の端を上げた。

未来の銀時のことを知るのは躊躇ったが、土方の言葉だけで充分未来の銀時の様子は伺い知れた。

（この子は、ちゃんと己の魂を守るために刀を振るえるようになるんですね）

短い付き合いではあるが土方の人柄は何となくわかりかけていた。その土方をして目標と言わしめる未来の教え子が、松陽はとても誇らしかった。

「ちっ・・・これは一生、心の中にしまっとくつもりだったのによ・・・」

思わず吐露してしまった本音に、バツが悪くなりながら土方は銀時に視線を向ける。そこには、頬を真っ赤に染めてぷるぷると震える銀色の子どもがいた。

目が合い、しまったと思った瞬間、銀時は脱兎のごとく部屋から逃げように出て行ってしまった。

「あー・・・土方さん、そのー・・・旦那には黙っときますんで・・・」

さすがにからかうことが出来なかったらしい。沖田がポン、と肩を

叩く。

「いやあ、大告白って感じでしたねェ・・・副長が旦那を目標にしてるなんて・・・まあ、わかりますけどね。旦那は強いお人ですし・・・」

山崎もうんうんと頷きながら生暖かい視線を向け、

「土方さん・・・これでツンデレキャラ確立ですか・・・そうですか、最初はまじめ一辺倒のツツコミだけだったのに、ギャグだけじゃ飽き足らず、ツンデレにまで手を出すんですか・・・」

新八は恨めしげにそんなことを呟いて、

「銀ちゃんに言わないでいてやるから、向こうに帰ったら酔昆布1年分寄越せヨ、ニコマヨ」

神楽に至っては脅しまでかけて来た。

「デメェ等・・・言いたきゃ言いやがれ！もうどうなったって知るか！！」

土方は開き直ってそう叫び、銀時を追うように部屋を走り出た。

「・・・フフ、皆さん・・・土方さんを虐めすぎじゃありませんか？」

そんな土方を見送って松陽が苦笑をうかべれば、同じような笑みがその場の全員から返って来た。

「いや、まさか・・・土方さんが旦那をあそこまで評価してることを認めるとは思わなかったんでイ」

「全くですよ・・・まさかの本音がここで聞けるなんて・・・」

「びっくりしちゃいました・・・会えばいつも厭味の応酬なのに・・・」

「・・・本当に銀ちゃんに言ったら、鳥肌立ったとか言われそうネ」

「いやゝ、さすがの銀さんでも今のはからかえないと思うんだけど」

彼等の言葉から、未来の銀時と土方の関係性が覗^{うかが}えて、松陽はクスクスと笑った。

「銀時は楽しく毎日を過ごしているんですね・・・それがわかっただけでも良かった」

松陽はそう言って、嬉しそうに目を細めた。

一方、銀時を追って部屋を出た土方は、屋根の上に月明かりに照らされてキラキラと光る銀髪を見とめ、屋根の上によじ登る。

「よろ・・・銀時！」

名を呼べば、彼はビクリと肩を震わせて、チラリとこちらに視線を

寄越した。

「なんだよ・・・」

「あの・・・悪かったな・・・その・・・妙な事言っちゃまって」

「・・・別に」

銀時は土方から顔を背け、言葉だけが耳に届く。

「でも、目標だったのは・・・マジだからな」

「恥ずかしい奴・・・」

「ウルセつ、自分でもそう思うわ!」

土方が言えば、ふるふると肩を震わせ銀時が抱えた膝に顔を埋めた。

「ふ・・・ククッ」

「・・・笑うなよ、クソガキ」

一瞬泣いたのかと焦った土方は、漏れ聞こえた笑い声にムツとした表情をうかべた。

「ふふ・・・俺のことガキとか言ってるけど、お前ら未来から来たんだろ? たいして歳変わらないんじゃない?」

「ぐ・・・今ア、何年だ?」

「安政6年?・・・だったと思うけど?」

「ってえことは・・・現代から・・・15年前か。テメエいくつだよ」

「んとお、数え歳で13?」

「とすると、満年齢じゃ12か。・・・げ。2つ上かよ」

「ふふん・・・年下かア・・・」

ニヤリ、と笑ったその表情はまさに未来の銀時のドSっぷりを連想させるもので。

思わず身を引いた土方に、銀時は小首を傾げた。

「何やってんの、お前。ってか、年下なら遠慮はいらねーよな?」

「・・・一応、俺は今のテメエの倍は生きてんだ。敬えクソガキ」

「はア?なんで年下を敬わなきゃならねーんだよ」

「・・・つか、人が変わってねエか?」

「変わってねーもん。お前の気のせいだってエ」

「・・・テメエ・・・吉田さんの前じゃ、猫被りしてやがんな!?!?」

ハッとして睨みつければ、銀時は目を細めた。

「先生の前、じゃなくてお前等の前、ね。・・・知らない人間に本性なんか見せられるかよ」

「・・・イイ性格してんじゃねェか」

「うん、よく言われるー。晋助とか小太郎とかに」

そう言われて、なんとなく違和感を感じていたことを思い出した。

「・・・高杉と桂の喧嘩を止めた一言、あれ、脅しか？」

「・・・・・・・・・・えへ？」

にぱっと笑った銀時に、土方はガツクリと肩を落とした。

（一瞬でも、コイツが可愛いと思った俺がバカだった！！！！）

「あのさ・・・村塾でも先生や晋助、小太郎以外ではあと2、3人しか俺の本性は知らないよ？」

「!？」

ガバ、と顔を上げた土方に、銀時は綺麗な笑みを向けた。

「これ、他の未来から来たヤツらには内緒ね？」

「・・・テメエの性格がひん曲がってんのは、俺を含め、あの場の全員が知ってるよ」

「へえ・・・そーなんだ。知ってて目標なんて言っちゃってんの？」

「引き摺るなよ、そのネタ・・・」

眉間に深いしわをきざんだ土方に、銀時はフツと表情を陰らせる。

「・・・ねえ、未来で先生とは会ってないの？初対面っぽかったよね、皆。俺の傍に先生はいないの？」

ゆらゆらと不安に揺れる瞳に見つめられて土方は目を瞠った。本性があんなでも、不安に思うことは多くあるのだろう。自覚無く怯える銀時もまた本物なのだ。

「未来の事は喋るな。俺は、ガキ共にそう言ったな？・・・その俺がベラベラと喋ると思うか？」

「思わ・・・ない」

「わかってんなら聞くな。テメエが成長していく過程でわかることだ」

「・・・先生を頼ってくる人間は多い。特に攘夷戦争に参戦してる奴等が・・・幕府にも知り合いがいるから、先生が橋渡し役になることも多くて・・・でも、いつか先生が言ってたんだ。“私は、お前達の未来（未来）を見ることができるようか”って」

直接口にはしないが、銀時の不安は土方には充分すぎるほど伝わっていた。

未来では、松陽がない。

“死”という言葉が頭を過る。それは、土方自身も危惧していることだった。

高杉や桂、銀時の今の状況が180度変わるとしたら、それは松陽の死によるものではないのかと。

想いの力

翌朝、銀時は体調を崩した。

土方は松陽に頼まれ、銀時の様子を見に来ていた。

「・・・あの後、いつまで屋根の上にいたんだよ・・・」

昨夜、途中で銀時に追い返された土方は、ふとんの中でぼーっとしている銀時に不機嫌に問う。

「・・・一刻くらい・・・」

「そら、体調崩すのも当然だな」

呆れた視線を向けられて、銀時はムツとしてふとんを頭まですっぽりと被ってしまう。

「煩い！出てけ！」

「おい、銀時・・・」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ったく」

すっかりへそを曲げてしまったらしく、土方がいくら話しかけてもふとんから顔を出そうともしないため、大人しく部屋を出て行くこ

とにした。

部屋を出ると、もし風邪でうつったりしたらと大変だから、と松陽に言われて別室にいた万事屋の子ども達が駆け寄ってくる。

「銀ちゃんは?!」

「大丈夫なんですか？」

「ああ、ちょっとダルイだけみてえだから午前中いっぱい大人しくしてりゃ良くなるだろ」

そう答えればホッとした様子を見せる。

「・・・まあ、うつるもんでもなさそうだし・・・様子見に行つてやれよ」

「行つて良いアルか？」

「ああ、ありゃただの寝不足と夜風に当たり過ぎてトコだな」

許可を得ると、2人は頷きあつて銀時の部屋へと向かう。

土方が子ども達を見送っていると、その背に沖田が話しかける。

「旦那はそれだけで体調崩すような、やわなお方じゃねエでしょうに」

「・・・だな。今日は千客万来つつつてたし、そのストレスもあるんだろ」

「いつもは姿を消すって言ってましたしねィ・・・いくら別棟で会うとはいえ視界に入る可能性もある・・・旦那の人嫌いも相当だぜィ」

「まだ、12、3のガキなんだ・・・しょうがねェだろ」

「それ、自分に言い聞かせてるんですかィ？・・・しょうがねェなんて思っ
てねェでしょう？」

沖田に指摘された土方はバツの悪そうな表情をうかべ、フイ、と顔を背ける。

「野郎にはいつも上手を取られてたからな・・・拍子抜けしちまうんだよ」

「確かにいっつも土方さんは旦那にからかわれてやすからねィ・・・でも、どうして俺達がここに来ることになったんでしょうねィ？白い人とか白い光なんてのを俺と土方さん以外は見たって言うてやるし」

「俺達ももしかしたら見てるかもしれないねェが、気づかなかっただけかもな」

「・・・もしくは、あの林にも何か仕掛けがあった、とか？」

「あー・・・それもあるか。そういやあの場所だけやたらと日の光が当たってて眩しかったんだよね、で、見上げて意識失えばここだし」

何気なしに土方が言った言葉に沖田はハッとした。

「土方さん・・・それ、林のど真ん中らへんじゃなかったですかイ？」

「ん？ああ・・・そうだったような・・・」

「同じでさア」

「は？」

「同じなんでさア！俺も日の光が随分と射しこんでやがると思っ
て、太陽を見上げたら意識がなくなってここに飛ばされてたんでイ」

「マジでか！」

「マジでさア」

そこまで同じ状況であれば、原因がそれであると特定できる。

が、結局は原因がわかってても帰る方法などわからないし、そもそもなぜここに来たのかすらもわからないままだ。

「旦那の過去が知りてエなんて・・・心のどっかで思ってたからかもしれないねィ」

「・・・それはあるかもしれねエな・・・そういうことなら、俺達3人が来ていて、近藤さんが来てねエのもわかる」

「あゝ・・・近藤さんの興味はメガネの姉貴だけに向いてやすから

ねィ」

「はァ・・・俺等がいなくて近藤さんは愛に走ってて・・・帰ったら真選組が滅亡とか笑えねェ冗談だよな」

「・・・・・・・・すいやせん、否定できるだけの根拠がねえでさァ」

「・・・・・・・・は、原田とかが、何とかすんだろ、たぶん・・・おそらく・・・・・・・・」

だんだん自信がなくなってきたところで、背後に気配を感じて2人は振り返る。

「うわっ・・・・・・・・いきなり振り返らないでくださいよ!」

「山崎か・・・・・・・・」

「なんでィ、脅かそうとしてたんなら承知しねェぜィ?」

「ま、まさか!・・・・・・・・旦那の様子はどうかなんて思いまして・・・・・・・・」

「あー、ああ、そうか・・・・・・・・今、ガキ共が様子見てるから・・・・・・・・お前も行って来い。総悟とな」

「土方さん?」

「イイから行って来い。気になってんだろ?」

不思議そうに視線を向けてくる沖田にそう言うと、土方は自分達に

用意された部屋へと向かうために歩き出す。

しばらく土方の背をじっと見つめていた2人だったが、やがてその背が見えなくなると、どちらともなく銀時の寝込んでいる部屋へと足を向けた。

「・・・白い人、白い光、太陽・・・」

部屋に戻った土方はブツブツと言いながら原因と考えられる事象をメモに書いていた。

そして、書いていながらそれらが一様にある人物のイメージと重なることに気づいた。

「・・・万事屋・・・いや、吉田さん、か？」

現代の銀時と松陽は良く似ている。

顔や性格なんかは違うが、まとう雰囲気似ているのだ。

「育ての親ってやつだからか。・・・それとも・・・野郎にとっちや絶対的な存在だったから、似せようと思わなくても似ちまうのか・・・」

銀時も松陽も人に好かれる、というか頼られるタイプであるし、それに見合うだけの包容力がある。

「あながち、総悟の考えも間違っただけな」

人の強い願望・想いにより起こされる奇跡。

万事屋の子ども達はもちろんのこと、土方をはじめとした真選組の面々も随分と銀時には世話になっている。面と向かっては言えないが感謝しているのだ。

だから、たまに思うことがある。彼のその軌跡は一体どのようなものなのか、と。

それが、今回のタイムスリップの原因ならば、その決定的な瞬間を目にするまではここにいるということになる。

「・・・あの調子じゃ、攘夷戦争にも関わってそうだな・・・」

攘夷戦争に出ていること自体は罪ではない。今現在攘夷活動をしていなければ真選組が動く必要はない。

だが、大きな事件の後には必ず銀髪の男の名が囁かれる。

あれだけ強い男だ。それに桂や高杉とも強い繋がりがあることを知ってしまった。おそらく、攘夷戦争時は幹部クラスの働きをしていただろう。

とすれば、彼の名が囁かれ天人の高官の耳に入れば、かつての記憶を呼び起す者もいるだろう。

どうか、天導衆を刺激してくれるなと願った。

「・・・野郎と敵対すんのは、もう勘弁願いてエんだがな・・・」

だが、命じられれば土方は躊躇なく銀時に刃を突き付けるだろう。

他でもない、真選組を、近藤を守るために。

タイムトラベルの目的を考えてみる

昼時になる頃まで、別棟はひっきりなしに人の出入りがあった。

銀時は自室にこもって出てこようとはせず、新八や神楽も銀時の部屋に行ったつきり出てくる気配は無かった。

「本当に、客が多い日ですねィ」

「ああ、銀時の言ってた千客万来ってのは大袈裟じゃなかったな・・・」

「それだけ、あの人が頼られてるってことですよね」

真選組の面子だけが居間でボーっとしながらぼそぼそと話していると、御勝手場から声がかけられた。

「銀時ィ、いるかー？」

「ん？この声は・・・晋助君ですね」

土方達よりも長く一緒にいるぶん、声で誰なのか判別がつくようになったらしい山崎が御勝手場に出て行く。

「いらっしやい、晋助君。・・・実は銀時君、体調崩して部屋にこもってるんだ。新八君とチャイナさんが一緒にいるはずだから、様子見に行ってあげてくれる？」

「・・・やっぱりな、そうだと思ったんだ」

高杉はそう言いながら居間にあがりこみ、土方と沖田を視界に入れると軽く会釈をした。

「やっぱりってえと、これはいつものコトかい？」

沖田が問えば、高杉はコクリと頷いた。

「うん、アイツ人見知りが激しいんだ。それに人酔いっていうか、気を許してる奴なら良いんだけど、それ以外の人間が周りに大勢いたりすると体調崩すんだよ」

「そうか・・・神経図太そうに見えて、意外と神経質なんだな」

土方が感想をもらせば、高杉は首を傾げた。

「・・・そういえば、退の知り合いとはいえ、オマエ等への拒絶反応ってあんまりなかったな。特に大人には顕著なはずなんだけど」

この辺りに住む大人達は別だが、銀時は松陽を訊ねてくる大人の気配を感じた瞬間に脱兎のごとく逃げる。まず、姿をそのまま見せておくことは無いのだという。

「・・・そう、なのか」

「退のときだって、銀のヤツが拾ったようなものだし・・・異世界の人間なら大丈夫ってことなのかなあ」

心底不思議そうに土方達を見つめ、高杉はそう呟く。

「・・・あ、えっと、晋助君。きっと、銀時君待ってるよ？」

「あ！そうだった・・・じゃあ、また後でな！！」

その視線に耐えかねて山崎が促せば、高杉は慌てて銀時の部屋に向かった。

「・・・・・・・・素直ですねイ」

「アレが、どうやったら超過激派攘夷浪士になるんだかな・・・」

パタパタと駆けて行く高杉の背中を見送り、沖田と土方は溜息をついた。

「あはは・・・俺も最初は驚きましたけどねエ。桂なんかは真面目過ぎて旦那や高杉にからかわれたりしてて、見えて飽きないですよ」

「この時までは・・・普通の子どもだったんだなア、アイツらも」

土方が呟く。

「・・・・・・・・戦争が、旦那達を変えちまったのかもしれませんがねイ」

沖田が言えば、土方は軽く目を見張った。

「なんだ、総悟も野郎が戦争に参加してたと思ってんのか」

「も、ってこたア、土方さんですかイ？・・・まあ、アレだけ桂

や高杉と仲が良くて、しかもあんなに強いんじゃないア、戦争に出ててもおかしくねエでしょう？」

「だよなア・・・てエことは、野郎が戦争に出る原因とやらがやっぱりこのタイムトラベルの目的になってくる、よなア？」

「ああ、そう言うことですかイ・・・確かに、その原因とやらを知るのは目的になりそうですねイ」

「目的があるからこそそのタイムトラベルですよねえ・・・じゃないと、いつ戻れるかもわからないままこのまま十数年を旦那達と暮らす羽目になりそうですねイ」

山崎の言葉に、土方と沖田が何とも言えない表情をうかべた。

「・・・そりゃ困る」

「そうだぜイ・・・冗談でも言うもんじゃねエぜ？山崎イ」

「あ、す、すいません!!」

「うーん、確かに、戻れないのは困りますよねえ・・・」

「「「!?!?!?」」」

突如、山崎の背後からにゅっと顔を出した人物とその声に、3人はギョツとして身を引いた。

「よ、よよよ、吉田さん!?!」

「も、もう話は済んだんでイ？」

「び、びびび、びっくりしましたよ、先生」

「ああ、驚かせてしまいましたか、すみません」

ニコニコとこちらを見やってくる松陽に、土方は鋭い視線を向けた。

「・・・なあ、吉田さん・・・アンタ、どこから聞いてた？」

「どこからって・・・山崎さんがこのまま十数年一緒に暮らすって言ってた辺りからしか聞こえてませんでしたよ？」

松陽が嘘をついているそぶりは無かったために、3人はホッと息を吐く。

「いや、聞いてなかったんならイイ。・・・すまねえな」

「・・・私に聞かれたらマズイ話でもしていたんですか？」

「ちょっと、な」

「そうですか・・・」

言葉を濁した土方に、松陽は苦笑をうかべる。

「あー、気にしねエでくだせエ・・・ただ、ちょっと未来の話をしただけでさア」

「ええ、わかりました・・・早く、戻れると良いですね」

そう言って微笑む松陽にバツの悪さを感じながら、3人はそれぞれに頷いたのだった。

じつは、せんせいってね・・・**(前書き)**

こちらも久々に更新です・・・

ちょっとギャグに走ってます・・・

じつは、せんせいってね・・・

それから3日が経った。

一向に戻る気配の無い状況にいい加減苛立ちが増してくる。

幼い銀時達と交流を重ねて行くうちに情が移っていると気付いてからは尚更だった。

「・・・マズイですねい・・・あっちに帰ったら、桂を見かけてもひっ捕らえようとか思えなくなってるかもしれないやせんぜ？」

「・・・高杉もな」

「うう・・・旦那に会ったら、銀時君とか呼びそうです・・・ってか、もう3人とも疑えないっていうか・・・」

居間から庭で遊ぶ銀時達を眺め、真選組という組織として攘夷浪士を追う立場にある土方達が唸り、頭を抱える。

「フン、しがらみの多い大人はコレだからダメヨ。自分の気持ちに素直になったら良いアル」

「いや、神楽ちゃん・・・自分の気持ちに素直になった真選組とか、有り得ないから・・・っていうか、警察としての機能がまったく無くなっちゃいそうな気がするの僕だけ？」

そんな大人達に神楽は呆れたような視線を向け、新八がいつもの調

子でツツコミを入れる。

「神楽く、新八く、遊ぼうぜ！」

そこに、庭から高杉が駆け寄ってきて、2人に声をかける。

「何して遊ぶアルか？」

神楽が訊ねれば、高杉はフフン、と笑って胸を張った。

「かくれんぼだ！」

（（なに、この可愛い生き物！胸張ってかくれんぼとか、ちょー可愛いですけど！！））

あの高杉を見たことがある神楽と新八は、目の前のチビ高杉に思わずほろりときてしまった。

この頃の可愛い高杉を返せ。

なんなの、あの高杉は。世界を壊すとかすっごくおっかないんですけど！！

「・・・ナニ？俺の顔に何か付いてる？」

「・・・何でも無いネ・・・ただ、時の無情さを知っただけアル」

「そうそう・・・時間って、ときに残酷なことをするよね・・・」

思わずたそがれる2人に、高杉は不思議そうに首を傾げる。

「何この子達！！なんでこんな悟りをいきなり開いちゃってんの！！」

本来ツツコミ役の新八までたそがれているため、唯一のツツコミ属性である土方が思わず口を出す。

「あはは、晋助エ、お前どんだけ変わったんだよ？」

2人の反応を見ておおよその見当がついたのか、銀時がケタケタと笑う。

「はア？」

「ホラ、聞いたんだろ？こいつらが未来から来たんだって」

「ああゝ・・・まあな」

つい昨日のことだった。銀時が体調を崩したこともあり、心配した高杉と桂が松陽の家に泊まりに来ていた。

夜になり、子ども達が寝静まった頃、松陽と真選組の面々が、未来に戻れない場合どうしようか、的な話し合いをしていたところに高杉と桂が乱入して来て、どういふことかと問いただされ結局この2人にも話すことになってしまったのだ。

もちろん後で高杉と桂は立ち聞きをしていたということを松陽に叱られたのだが。

「ふむ、つまりは、神楽ちゃんと新八君が知る高杉と、この時代の

高杉は全くの別人のように見えるということだろうか」

桂が問えば、銀時は頷く。

「じゃねエのオ？・・・じゃなかったら、時の無情さとかなんとかって言わねーだろ？」

「おお、ナルホド」

「・・・てか、時の無情さを感じるくらい俺って変わるのか？」

高杉が不安そうな表情をうかべて土方達を見つめる。

「あー・・・未来に関することは一切教えられねーって言ったろ？」

つい教えたくなってしまうような高杉の視線から目を逸らし、土方が答えると小さく舌打ちする銀時。

「チッ、使えねエな」

「・・・ほんツとに可愛くねエなッ！！」

「ふーんだ。年下になんか可愛いって思われたくないっつーの！」

「デメツ・・・」

「ま、まあまあ、副長、落ち着いて・・・」

思わず腰をあげた土方を宥めながら、山崎は苦笑をうかべる。

「本性むき出しの銀時君も良いじゃないですか、いつも通りで・・・
副長は元々こういう銀時君を望んでいたんでしょ？」

その後、復調した銀時は猫を一切被っていないかった。

本来持っていたらしいドSっぷりを見事にさらけ出し、土方達を翻弄し始めたのである。

「・・・でも、ムカつく」

自分が望んだこととはいえ、己の半分も生きていない子どもの姿で上手うわてを取られると、これ程にムカつくことはない。

「まったく、土方さんはワガママですねィ」

「オメエに言われたくねェよッ!!」

やれやれと肩を竦める沖田に怒鳴り、土方は恨めしげに銀時を見つめた。

「・・・なんだよ？」

「どうしてこうも捻ひねくれちまったんだ？」

「さあ?・・・物心ついた時から戦場にいたし、生きてくの**に**必死だったし」

あまりにも衝撃的な銀時と松陽の出逢い。

それを聞けば、銀時が松陽に心を許しまくっていることも理解でき

る。

が、なんであの松陽の傍にいるのに、こんなドSに育つのか不思議でたまらない。

「ハッ・・・まさか、吉田さんもドSとか・・・」

「「・・・・・・あー」」

「先生な～・・・」

「確かに、怒る時はドSかも・・・」

「というか、笑顔で怒るとか、すごい怖いし・・・」

冗談のつもりで言ったのに銀時達からまともな反応が返ってきて、土方達は思わず笑顔で怒る松陽を思い浮かべてしまった。

「・・・そんなに怖いとは思えないですねィ」

沖田がポツリと呟く。

「バツカ言え!!」

「あの笑顔で、すごいどす黒いオーラ背負うんだぞ!!」

「そんなに怖いんですかィ？」

「怖いも何も、地獄の閻魔さまだって逃げ出す・・・」

銀時と高杉の剣幕を見て、キョトンとして問い返した沖田に答えた桂が、途中で言葉を止める。

「ほう・・・それは興味深いことを聞きました」

「「「「!?!?!?!?!」」」」」

ギギギイ・・・と音が鳴りそうなほどぎこちなく振り返る子ども達の視線の先には、笑顔の松陽。

「さて、地獄の閻魔さまが逃げ出すとは、一体何のことでしょう？」

「「「「~~~~~」」」」ツ!?!?!」」」

声にならない悲鳴をあげ硬直してしまった3人に、笑顔の松陽。

松陽にズルズルと引き摺られていく3人を見送り、土方達は顔を見合わせる。

「・・・ま、まあ・・・あの3人の先生なんだしな」

何というか、その一言に尽きる、らしい。

先生の葛藤

その夜、土方達真選組の3人が松陽に呼ばれた。

「・・・先日は晋助や小太郎に聞かれてしまつて頓挫してしまいましたからね」

にこやかな松陽だが、昼間の出来事が土方達の脳裏をよぎる。

（笑顔で説教とか・・・マジで怖えて・・・）

淡々と、諭すように説教をしているのだが、その背後に感じる黒い気配を感じないものはいなかっただろう。

しばらくは高杉も桂も銀時も大人しくなるはずだ。（ついでに神楽や新八もビビっていたので見るからに大人しかった）

「・・・一体何の話なんだ？」

昼間の松陽の（黒い）笑顔を脳裏から振り払い、土方が問う。

「そう、皆さんがこちらに来て随分と経ちますから・・・ちよつと検証してみようかと」

「検証、ですかイ？」

沖田が不思議そうに問えば、松陽はにこやかに頷いた。

「ええ、まず・・・皆さんがいつの時代からいらしたのか、教えて

ください」

「・・・吉田さん、それは・・・」

「・・・・・・・・大丈夫ですよ、子ども達には言いませんし・・・それに・・・」

土方が戸惑うような視線を向ければ、松陽はいつもとは違う寂しげな笑顔をうかべる。

「それに、なんですか？」

山崎が、そのいつもとは違う表情に不安を覚えて先を促す。

「・・・それに、皆さんのいらった時代では、私はあの子達の傍に居ないのでしょう？・・・特に銀時、あの子の傍に居ないということは・・・自惚れかもしれませんが、あの子が私の傍を離れることは絶対に無いと自負しています。もし、あの子が私の傍に居ないのであれば・・・私自身が皆さんのいらした時代では生きていないということになるかと、そう思うのです」

松陽から告げられた言葉に、3人は目を瞠った。

これ程冷静に状況を判断し自分のことであるのに淡々と語る松陽が、子ども達の前で優しげに微笑む彼とはまるで別人のように思えた。

「松陽先生、そりゃ、どっから思いついたんでイ？」

沖田が問う。

「・・・皆さんが銀時を見つめる目は既知のものを見る目だと言いましたね？それと同じ道理です。皆さんは私とは初対面だったでしょう？」

松陽が告げれば、三者三様に視線を逸らし、気まずげに黙りこむ。

「ほら、ね？・・・思った通りです。私はあの子達を残して逝ってしまうんですね」

悲しげな微笑みを湛え、松陽は視線を落とした。

「あの子達のなかで一番心配なのは晋助です。あの子は・・・あまりにも純粹すぎる。私に傾倒している節があって、他の誰もが“本当の”あの子に触れられていない。・・・銀時や小太郎には少しだけ心を許しているようですが、本当に“少しだけ”なんですよ」

「・・・高杉は、」

土方がその名を口にする。

松陽が己に視線を向けてくると、土方は覚悟を決めてその言葉を口にした。

「・・・高杉は、俺達の時代では・・・超過激派の攘夷浪士の頭目になっている。鬼兵隊といって、京に潜伏して要人暗殺やド派手なテロ・・・騒動を起こしたりしてる」

「・・・皆さんは、晋助を捕らえる側の立場、なんですね」

松陽が苦笑をうかべる。

「・・・・・・・・・・ああ」

「副長・・・・」

心配そうな視線を向けてくる山崎に大丈夫だと頷いて見せ、土方は松陽を真っ直ぐに見つめた。

「桂も、元は過激派の攘夷浪士だったが、今は穏健派に変わっている。一度、爆破テロを起こした時に、万事屋・・・・銀時と行動を共にしていたが、アイツらの様子からするとどうやら偶然か、もしくは桂が何らかの手段をとって接触しただけのようだった」

「あの時からですねイ、俺達と旦那の腐れ縁ってやつア」

「・・・・・・・・そうですね」

思い返せば、アレが銀時との初対面だったのだ。

いきなり切りつけたりバズーカを発射したり、かなり危険な初対面だった気がするが、それでも銀時は真選組の肩を持つてくれることの方が多い。

彼の過去は知らないが、攘夷戦争に出ただろうということくらいはわかる。

「小太郎もですか・・・・あの子も潔癖な所がありますからね・・・・もし、自分の納得のいかないことがあったら、とことんまで追求しそうです」

「・・・幕府は“攘夷志士”を裏切って天人共に膝を折った。それが、野郎にとっちゃ氣に食わなかったんだろ」

土方の言葉に、松陽はああ、と溜息交じりに声を絞り出した。

「・・・そうだろうと思っていました・・・幕府はこの時代、既に弱腰になっているんですよ・・・私は晋助のお父上にも手伝って頂きずっと嘆願してきました。彼等、天人の技術を学ぶべきだ、いつまでも刀の時代ではないのだと・・・戦力差というものを自覚すべきで、このままでは将来有望な若者達が命を落とすばかりです、とね」

高杉の父が松陽を訊ねて来たのは数日前、それが幕府からの返答であつたのなら・・・。

「幕府は・・・」

「彼等の技術を学ぶことは無い、と。忠義有る若者が戦い、その中で命を落とすことの何が悪い、名誉の死なのだ、と・・・そういう返答でした。・・・名誉の死などと美しく最期^死を飾り立てることなど無意味です。私ならばこう教えます、生きることこそが素晴らしいことであり、名誉なのだ・・・あの子達にはそうであってほしい。最期まで美しく生きて欲しいのです」

松陽の言葉に、土方達は思わず熱いものが喉の奥からこみ上げて来て、声を詰まらせた。

松陽の考え方は武士としては間違っているのかもしれないが、教える子の身を案じる師としては決して間違っていないと、そう思うのだ。

「銀時には私の想いを全て伝えています。いつ離ればなれになっても良いように。・・・私の思想はこの時代では異端なのでしょう。幕府にとっても天人達にとっても私の存在は疎ましいもののはずす」

「・・・天人も？」

のろのろと顔をあげて問う山崎に、松陽は頷く。

「ええ、私の考えを幕府が受け入れれば、幕府に反抗する力を与えることになります」

「・・・ああ、そういうことか・・・幕府を支配するつもりでいる連中にとっちゃ、余計な知恵をつけさせるわけにはいかねえってことだな？」

土方が確認するように視線を向ければ、松陽は頷いた。

「そういうことになりますね・・・さて、私の命を奪うのは幕府か、天人かはわかりませんが、いずれにしても命を狙われていることに変わりはないんです」

「で、でも・・・今すぐってわけじゃないかもしれないじゃないですか」

山崎が慌てた様子で言えば、松陽は悲しそうに微笑む。

「そうかもしれませんが、ただ単に、あの子達が私の元を離れて行ってしまった・・・ということもあり得るでしょう」

「そ、そんなこと・・・ない、と・・・」

山崎の言葉がしりすばみに消えて行く。

「・・・それだけは絶対に無いです」

「そうネ」

障子戸が勢いよく開かれ、またも立ち聞きしていたらしい新八と神楽が部屋に入って来た。

「デメエ等・・・」

「銀ちゃん達は居ないネ・・・ちゃんと寝かしつけてから来たアル」
睨んでくる土方にそう答え、神楽はツンと顔を逸らす。

「・・・あの、それだけは絶対ないって、どういうことですか？」

そんな中で松陽がじっと新八を見つめて問う。

「以前、桂さんと高杉さんが・・・その・・・お、大喧嘩してる所を見たことがあって、その時に・・・ちょっと・・・き、斬り合いたいになった時に、2人とも懷に松陽先生の教本を忍ばせて、大怪我にならずに済んだんです！」

「思い出は大切にするもんだって、片目・・・晋助が言ってたヨ」

桂と高杉の大喧嘩と聞いて、あの桂一派と鬼兵隊の事件を思い出した真選組の面々は、やっぱり銀時達も関わっていたのかと嘆息する。

「教本を・・・そうですか・・・」

泣きそうな顔で呟いた松陽に、新八はハッキリと告げた。

「確かに、銀さん達の傍に貴方は居ません。でも、心の中にはずっと生き続けてるんです。だから、そんな投げやりなコト言わないでください！」

「・・・そう、君の言う通りですね、新八君」

自分の教えが時を経ても彼等の中にあるのであれば、それで充分なのだ。

大事な大事な教え子と養い子、己が居なくなつた後、どうなつてしまふのかだけがどうしても心配でならなかった。

己の教え子というだけで不遇な扱いを受けやしないか、朋友と道を分かち再びあの荒んだ暮らしをするようになるのではないか。

悪い方へと思考は進む。

もしかしたらあまりにも心配しすぎて、自分が真選組や万事屋の子ども達を召喚よんでしまったのではないか、そう松陽は考えていたのだ。

心配無用!!

「松陽先生、心配しないでください。桂さんのことも高杉さんのことも、絶対に銀さんが何とかしますから!」

「そうネ! 銀ちゃんにかかれば、絶対に何とかなるアル!」

新八と神楽が絶対的な信頼を銀時に向けていることがわかる言葉。

ああ、銀時もまた、人々に頼りにされているのだと実感する。

「そうですぜイ、銀時・・・旦那は頼りになるお人でさア。俺達、真選組も何度助けられたかしれやせん」

沖田までもがそんなことを言いだし、山崎もその言葉に力いっぱい頷く。

「・・・なあ、吉田さん。未来のことは心配すんな。俺達が何とかする・・・こう見えても幕臣だからな、ヤツ等が悪いことする前に止めてやる。・・・だから、アンタはヤツ等に今できる限りの愛情を傾けてやってくれ・・・ただ、それだけでいい」

最後に土方が言えば、松陽は泣き笑いのような表情をうかべた。

「・・・ありがとうございます・・・本当に、あの子は幸せ者ですね。このような友人達に巡り会えるとは・・・叶うならば、私もこの眼でその姿を見たかった・・・」

そこに至るまで、ただ平坦な道を歩いてきたわけではないだろうとはわかってはいるが、こんな未来があるのなら、それも無駄ではないと思えるのだ。

己の教えが、万が一にでも彼等の未来に悪い影響を与えていたのなら、それこそ死んでも死にきれないというものだ。

「銀ちゃんは、今、とっても幸せヨ。・・・私がいて、新八がいて、アネゴがいて・・・ババアと泥棒ネコがいて、タマがいて・・・税金泥棒だって、ちよつとは役に立つし、ヅラだってたまに遊びに来る・・・」

「マジでか！・・・あ」

土方がハッとして声をあげた後、沖田と山崎に白い目を向けられる。

「・・・副長、空気読みましょうよ」

「・・・すまん」

山崎に注意され、申し訳なさそうに頭を下げた土方に失笑が漏れる。

「・・・とにかく、銀ちゃんは幸せネ！！写真とか、持ってたから見せてあげられたのに・・・でもでも、銀ちゃんは幸せそうに笑ってるヨ、私のこととか新八のこととか、先生が銀ちゃん達を見るような目で見てくれる！！」

神楽の言葉に松陽はハッとした。あれ程に荒んだ生活をしていた銀時が、己の元にやって来て、少しでもその空っぽな心に愛情を注げることができたならと思い、いつも愛情たっぷり視線を、手を、

心を向けてきた。

だから、銀時が他人に向けて愛情を向けられる。向けられている。その証明となる言葉に心底ホッとした。

「神楽ちゃん・・・ありがとう。それを聞いて、ホッとしたよ」

目を緩めた松陽に、懸命に頬を紅潮させながら話していた神楽はフツと力が抜けたようにその場にへたり込んだ。

「か、神楽ちゃん大丈夫?!」

新八が心配そうにその隣にしゃがみこむ。

こくりと頷く神楽にホッと息をつき、新八は松陽に笑顔に向けた。

「僕達が銀さんを守ります。もちろん、銀さんの方が強いですし、僕達を守ろうとしてくれますから、なかなかうまくいきませんが・・・でも、絶対に傍から離れたりしません」

神楽の言葉と新八の決意。それが松陽にどれだけの希望を与えたのか、彼等にその自覚は無いだろう。

「・・・本当に・・・あの子は幸せ者です・・・」

ほう、と、つかえたものが全て無くなったかのように息をついて、松陽は小さく呟いた。

話し合いが終わり、自分達に宛がわれた部屋に戻った土方は、隣でボーっとしている沖田に問う。

「なあ、本当に・・・話しちまってよかったのかな」

「さア?・・・でも、松陽先生は喜んでやしたぜイ」

「でも・・・これで、未来が変わっちまったら・・・」

「らしくねエですねイ・・・その時はその時でさア。松陽先生もこの事は旦那達には話さねエって言ってましたし、人の生き死に関わるような内容でもないですしねイ」

いつもは意地の悪いもの言いをしてくる沖田も、今日はそんな気分ではないらしくまともな返事が返って来る。

「・・・そう、だよな?」

だから、土方も素直にその言葉を受けとめ、頷いた。

「旦那も桂も高杉も・・・また、この時代の時のように仲良くできたら、イイですね」

山崎がポツリと言う。

新八が大喧嘩と称したアレは、桂一派と鬼兵隊の間に決定的な亀裂を作ったという。

それ以来、鬼兵隊側には危険な噂ばかりが流れ、元々、遠慮も無しに將軍やら真選組やらを狙ってきた高杉が、更に行動をエスカレートさせていつている。

もし、銀時達と和解ができたなら、超過激派と言われる彼が穏健派に変わることも夢ではないのかもしれない。

この時代の高杉はよく笑う。

手配書に描かれているような不敵な笑みではなく、本当に、心底楽しい思っているような笑み。

クールな一面もあるが、それは銀時や桂の前では霧散する。

それを目にしてしまえば、そんな希望も湧くというものだ。

「・・・戻ったら、本格的にヤツ等の事を調べてみるか・・・」

捕まえるためだけではなく、その思いを知るために。

「そうですね・・・しばらくはサボリも無しにしときまさア」

「・・・・・・・・それはいつも無しにしとけ」

いつもと違って弱々しく注意し、土方は布団にそのまま倒れ込む。

「・・・・この時代の高杉や桂と・・・・ちょっと話してみまさア・・・・」

何か、わかることもあるかもしれない、そう呟いて沖田が目を閉じる。

「・・・そうだな、俺も・・・銀時に・・・」

布団に倒れ込んだ途端に襲ってくる眠気に逆らわず、土方もそう呟いて静かに目を閉じた。

忍び寄る悪意（前書き）

脱・スランプ！

待っていてくださった方も、待っていたわけじゃないけれど通りすがった方も楽しんで頂ければ幸いです。

忍び寄る悪意

翌日は雨だった。

外で遊ぶこともできず、部屋で教本を読みながらゴロゴロとしている子ども達。

「おい、道場で剣術の稽古とかしねーのか？」

なんとなく暇を持て余しているような子ども達に土方が問えば、銀時がちらりと視線をあげた。

「だって・・・剣術になると俺の一人勝ちだもん。小太郎や晋助がつまんないじゃん」

「・・・じゃあ、俺達が相手してやるつつたらどうする？」

ニヤリ、と笑った土方に、桂と高杉が表情を輝かせた。

実は山崎から“鬼の副長”の逸話をいくつか聞かされていて、土方の実力が気になっていたのだ。

「やる！」

「俺も!!」

「・・・銀時は？」

「・・・・・・・・やる」

大人と子ども。

そこはもちろん手加減をする気ではいるが、あの対新八戦の銀時の動きを見れば油断は禁物。

「面白くなってきやしたねィ」

ニヤリと笑う沖田に、土方は視線を向けた。

「まずは俺が桂の相手をしてやる。高杉は沖田が相手してやれ」

「りょーかい。手加減はしねーぜ？」

「フン！お前こそ後で吠え面をかくなよ！」

「なー、俺は？」

「テメェは後だ。順番に相手してやるからちよつとだけ待ってろ。良いな？」

「んー、うん。イイよ」

あっさり頷く銀時に、やけに聞きわけが良いなと思うものの、余計なことをいってまたドS発言をされても困るので、土方は黙っていることを決めた。

「じゃあ、道場にレッツゴー！ですね」

山崎が先頭に立ち、子ども達を引き連れて道場へと向かう。

その後ろを土方と沖田は互いに視線を合わすでもなく並んで歩く。

「……土方さん、これで一人一人と話をしようって魂胆ですかい？」

「まあな。オマエも好きなようにこの時間を使えや。面と向かってきちんと話をするなんざ、俺にゃ無理だ」

「……そりゃ、俺だって……まあ、ちょっと聞きてエコトもあったし、有効に使わせてもらいやす」

「……ニコマヨとサドヤローがなんだかおかしいネ」

「まあ、何か考えがあるんでしょう。僕らだって正直手詰まりだし、この時代の桂さんや高杉さんの強さも見てみたいし……いいんじゃない？」

「まあ、そうアルな……」

一部始終を見ていた神楽と新八も、なんととはなしにその後について行った。

竹刀の打ち合う音が道場に響く。

土方も沖田もそれなりに手を抜いてはいるようだが、桂と高杉もただ攻められっぱなしというだけではなく、時折、2人をひやっとさ

せている瞬間がある。

「さすが、強いですね」

「うん、やっぱり・・・この時代は銀ちゃんがハチャメチャなだけで、他の2人も充分強いアル」

「ハチャメチャってなんだよ」

土方VS桂、沖田VS高杉の様子を眺めながらの神楽と新八の感想に、銀時がムツとする。

「銀さんは、型が滅茶苦茶なんです。だから先が読めなくて・・・」

「でも、先生は俺より強いぞ」

「じゃあ、松陽先生は銀さんの太刀筋が見えてるんですね・・・実は剣の達人クラス、とか？」

「わかんない・・・土方と沖田アイツらも手加減してるみたいだし比べられないけど・・・でも、本気の晋助と小太郎が2人掛かりでも余裕でいなせるくらいは強いよ」

「それ、相当じゃないですか」

子どもながらに桂や高杉の実力はかなりのものだ。この先どんどんと強くなっていくだろうことは間違いない。

その2人が本気になってかかって行っても余裕とは、松陽はどれだけ強いんだと新八は舌を巻く。

「先生・・・強いアルか」

あの温和そうな松陽が戦場で刀を振り回す様子を思いうかべようとした神楽だったが、どうしても縁側でお茶を飲んでほけほけと笑いながら子ども達を眺める松陽しか、うかんでこない。

「でも、先生が強くて強くなくても、どうだっていいんだ」

「？」

「・・・松陽先生について行けば間違いないって思わせてくれたから、それだけで俺には充分なんだ」

「・・・僕達もそうでしたよ？銀さんについて行けば、間違いないって思わせてくれたから・・・傍にいますから」

「そうネ。時々どうしようもなくマダオだけど、銀ちゃんはいつだって私達のことを守ってくれたヨ」

「・・・・・・・・新八、神楽・・・」

思わずと言った様子で言葉を詰まらせた銀時に、神楽が抱きつく。

「銀ちゃん顔が真っ赤ネ！超絶可愛^{ちようぜつ}いアル！！」

「ちょ、放せつてば！！」

「あはは、ホントだ、耳まで真っ赤だ」

「新八！神樂を何とかしてくれよ！！」

「嫌ヨ！この銀ちゃんお持ち帰りしたいネ！！」

ジタバタと暴れる銀時を抱きしめながら神樂が言えば、新八が苦笑する。

「いやあゝ・・・それは無理かな」

「えー、だって大人の銀ちゃんじゃこうはいかないネ！」

「まあ、僕だってチビ銀さんは可愛くて好きだけどね、こう、色々問題が起こるんじゃないかと思うわけで・・・」

「ほら！新八もこう言ってるだろ！？放せれば、神樂！」

「むゝ、つまんないアル！！」

「人をおもちやにするなあああ！！」

まるで万事屋の中にいるかのような賑やかさに、土方達も思わず手を止めた。

「おいおい、おまえら・・・こっちは真剣に稽古やってんだ。ちょっと静かにしとけよ」

とは言うものの、その声に怒気は含まれていない。

銀時が子ども達に振り回されている様子が、現代の彼に被って見え思わず懐かしくなってしまったからだ。

「あー、帰ってーですねィ・・・何だか、近藤さんのストーキングも旦那の糖尿も、急に懐かしくなってきたやした」

「というか、俺達・・・いつになったら帰れるんでしょうね」

沖田が呟き、その呟きに山崎が肩を落とす。

「全く見当がつかないのか？」

そんな土方達に桂が訊ねる。

「・・・全く、だな」

短く土方が答えると、高杉が首を傾げる。

「来た方法を調べればわかるんじゃないのか？」

「その来た方法自体がわかんねーんだよ。全員気付いたらこっちに
来てたって感じだからな」

「タイムトラベルの類型としては、人の強い思いによって起こるつ
てのがありましたけどね。何を強く思ったのか、誰の思いなのか、
それがわからないと・・・」

土方の答えに山崎が補足する。

「思い、か・・・」

銀時が呟く。

「銀時？」

「どうした？」

考え込んだ様子の銀時の傍に、桂と高杉が歩み寄る。

「うん・・・コイツ等って未来では俺達に近しい人間だろ？ だったら、俺達が先生に逢いたいって強く思ってた、それに巻き込まれたってことは・・・ないかなって」

「でも、それは・・・」

「確かに、俺達の傍に先生がいないことが前提だけど・・・でも、コイツ等の態度見てればわかるだろ？ 俺達は知っていても、先生のコトは知らなかった」

「つまり・・・」

「嘘だ！・・・そんなコト、あるわけねーだろ！！銀時！ふざけたこと言うなよ！！」

叫んだ高杉が持っていた竹刀を床に叩きつける。

「晋助、落ち着けて・・・」

「煩い！！そんなコト、認めない・・・認めるもんか！！」

伸びてきた銀時の手を振り払い、高杉は道場を走って出て行ってしまう。

「・・・不用意な発言、だな。銀時」

「・・・んー、ちょっとまずかったかな・・・晋助、最近父親が帰って来てピリピリしてっから・・・」

「松陽先生のところに行くって言われてるらしい」

「最近は毎日お咲さんが迎えに来るもんな」

「・・・高杉もわかってるんだ・・・アイツ、頭は良いからな」

そう言う桂も薄々は気付いてはいたのだろう。未来の自分達の傍には、何らかの理由で松陽がいないのだ、ということ。

「ヅラ・・・」

「ヅラじゃない、桂だ。・・・高杉のコトはお前達が気にすることじゃない」

神妙な顔つきになった神楽に、桂が笑みを向ける。

「・・・おい、お前等にとって、吉田さんってのはどんな存在だ？」

土方が唐突に訊ねる。

キョトンとして目を瞬かせた桂だったが、土方が答えを待っているのに気付いて慌てて自分の中の答えを探した。

「え・・・と、俺にとって先生は・・・人生の師だ。あの人程に確

たる信念を持って、それを曲げずにいられる者を、俺は知らない。
・・それに、先生は・・・俺達に生きる術を、意味を与えてくれた」

桂の言葉に頷きつつ、銀時が続けて答える。

「・・・先生が俺を拾ってくれた時に言ってたんだ・・・他人にお
びえ自分を護るためだけにふるう剣なんて捨てろ、敵を斬るため
ではない弱き己を斬るために、己を護るのではない己の魂を護るた
めに、その剣をふるえと。・・・俺は、その時から先生の言葉を守
って行こうって決めたんだ」

「・・・そう、か」

答える桂や銀時の瞳には一点の曇りもなかった。

一方・・・

「おや、晋助？どうしました？」

涙をボロボロと流しながら道場から己の元に走って来た高杉に、松
陽は首を傾げた。

「せんせエ・・・嫌だよ、俺、先生の傍に、ずっといる！・・・だ
から、いなくならないで！！」

その言葉で大よそのことを理解した松陽はその頭をポンポンと軽く
叩くように撫でた。

「・・・まあ、彼等の話を聞けば、気付いて当然ですよね。・・・ねえ、晋助。私はそれでも君達の心の中に生き続けていければそれでいいと思ってるんですよ。だから、晋助の中の私を、殺さないでくださいね?」

「そんなコトしない!!俺、絶対、先生の傍を離れないから!!!」

「・・・晋助・・・」

抱きついてくる高杉を抱きしめ、松陽は苦笑をうかべた。

父親がここに来ることに難色を示していることは松陽も知っている。だからこそ不安なのだろう。

だが、父親が高杉を心配する気持ちもわかる。今・・・松陽の傍にいるのは危険なのだ。幕府から天人からも疎まれている己の傍は・・・。

「・・・先生、袴の裾とか肩とか濡れてるよ?どっかに出かけてたの?」

松陽に抱きしめてもらって少し落ち着いたらしい高杉が疑問を口にする。

一瞬、松陽は動揺したが、高杉に悟られぬように笑みをうかべた。

「ええ・・・庭に、大事な書類が飛んでっちゃったんですよ。それを拾いに行っただんです」

懷にしまわれた、それ。

布に包まれてタンスの奥にしまわれた、もの。

子ども達にも、土方達にも、まだ気付かれるわけにはいかなかった。

「・・・さあ、晋助。仲直りついでに銀時達を呼んで来てください」

「・・・う・・・」

「銀時達だって、混乱してないわけじゃないんですよ？」

「・・・わかりました・・・行ってきます」

「よろしい」

気乗りしない様子で再び道場に向かう高杉を見送り、松陽は懷に手を差し入れる。

出てきたのは一通の手紙。

先程、油紙に包まれたそれが矢に括りつけられて庭に向けて放たれた。

《余計な真似をするな》

手紙には、そのたった一言が書かれていて。

松陽はそれを凪いだ表情で見つめ、再び綺麗に折り畳んで懷にしまい込んだ。

変事の予兆

最初に松陽の様子がおかしいと気付いたのは、一体誰だっただろうか。

道場から呼び戻され、まったりとお茶を飲んでいたところまでは普通だったのだが、時折、外へと視線を向けるその目に浮かぶ感情は、焦りかそれとも怒りか――。

「吉田さん？」

沖田達の視線に促されて、土方が口を開く。

「・・・あ、ああ・・・すみません。为什么呢？」

明らかに心ここにあらずといった様子の松陽に、子ども達も気遣わしげに視線を向ける。

「あー・・・その、なんだ。具合が悪いなら、部屋で休んだ方が良んじゃないかねエのか？」

「いえ・・・具合が悪いというわけではないんですよ。ただ、ちょっと気がかりなことがありますね。・・・気にしないでください、大したことじゃないんです」

「・・・まあ・・・吉田さんが、そう言うなら・・・」

沖田達と互いに視線を交わらせ、これ以上の情報は得られないと判断した土方は大人しく引き下がった。

子ども達もそんな空気を感じ取ったのか、聞き出そうとはせず、
ぴったりと松陽の傍にくっついた。

「?・・・銀時?小太郎??晋助??」

そんな子ども達の態度に、松陽は不思議そうに首を傾げた。

いつもなら、子ども達の気持ちを悟って苦笑するだろうに、それすらも気付けないほどに心を煩わせているものがある、ということなのだろう。

嫌な予感が脳裏を過る。

元いた時代に戻るために必要であればどんなことでもするつもりだが、それが銀時達の今の生活を一変させかねないことであったのなら・・・。

「・・・どうしたらいい」

ポツリ、と呟いた声は思いの外、室内に響いた。

「土方さん?」

松陽がキョトリとする。

「・・・何でもねエ。今日は夕飯も要らねえよ、ちょっと頭冷やしてエんだ」

のそりと立ち上がり、土方は皆に背を向けて自室へと向かう。

残された面々は何とも言えない微妙な空気に言葉を詰まらせる。

「・・・あ、えーと、じゃあ1人分抜いて、お夕飯作っちゃいますね！あ、ほらほら、小太郎君も晋助君もそろそろ帰る時間じゃないかな？」

「え、あ！本当だ！」

「早く帰らないと・・・」

桂はともかく、高杉は深刻だった。約束の時刻までに帰らなければもう2度と松陽の家に行くと言われかねないからだ。

「若様！お早く、お早くお戻りください！」

ちょうど良く、女中のお咲が迎えに来る。

「お咲、父上は？」

「まもなくお帰りです、今日はお仕事が早く終わられたということ・・・侍従が既に帰って来ておりますから・・・！」

「マズイ・・・松陽先生！また明日！！」

「ええ、また明日」

「俺も帰ります。さようなら、先生」

「はい、さようなら。2人とも気をつけて帰るんですよ」

「「はい！」」

慌ただしく帰って行く2人を見送り、松陽はそのまま空を見上げる。

「雨・・・止みそうにありませんねェ」

「・・・先生？」

銀時が心配そうに松陽を見つめる。

「・・・いっそ、雨が全てを洗い流してくれたらいいのに・・・」

切なげに呟いた松陽の心中を知るのは、もう少し先のこと。

数日後、雨上がりの曇り空を見上げる。

最近では戦争も激しくなってきた、村塾に通ってくる子どもも少なくなかった。

松陽は普段通りに振舞ってはいるものの、時折、庭の方を恨めしげに見やる姿をたびたび見かける。

「土方さん・・・考えたくはねエですが、松陽先生は誰かに脅されてんですかねィ？」

「・・・もし、そうだとしたら・・・吉田さんは」

沖田の言葉に、土方は眉間のしわを深くした。

「副長、沖田隊長・・・先生が呼んでますよ」

縁側でボーっとしている2人に、山崎が声をかける。

「吉田さんが？」

「はい」

「・・・・・・・・じゃあ、行きましようかねィ」

「ああ・・・」

重い腰をあげ、松陽の部屋へと向かう。

先日から感じている嫌な予感が、ますます強く警戒音を鳴らす。

「・・・・・・・・まさか・・・まさか、な」

ふと脳裏を過ったモノを土方は頭を振って振り払おうとする。

だが、こびりついてしまったそれは、中々消えてはくれなかった。

そして、松陽の部屋に入った土方と沖田と山崎は、松陽が穏やかに微笑んで自分達を迎えたのを見てぞくりと肌を粟立てた。その笑顔は、まるで死を覚悟した者のそれだったからだ。

「松陽、先生？」

沖田が声を詰まらせながらその名を口にする。

「……皆さんにお見せしたいものがあります」

松陽は目を細め、タンスの奥から布に包まれた何かを取り出した。

「……それ、は？」

土方が問う、すると、松陽はクスリと笑ってその包みを解いた。

「……………矢、ですか？」

山崎が不思議そうにそれを見つめる。

「ええ、矢です。先日、庭に向かってコレが放たれました」

「「「!!」」」

「そして、コレにはこの文が油紙に包まれて括り付けられています
た」

懐から出した文を土方に手渡すと、松陽はスッと目を閉じた。

「……………吉田さん……これは」

内容に目を通した土方はその文を沖田に手渡し、松陽を真っ直ぐに見つめる。

「……ええ、脅しですね。明らかに私のしていることを面白く思っていない者の仕業でしょう」

目を閉じたままの松陽は、淡々と答える。

「……松陽先生、今からでも遅くねエでさア！萩から離れた方が
良い！」

文を持ったまま沖田が叫ぶ。

「いいえ、私は脅しには屈しませんし、ここから離れもしません」

「松陽先生！！」

「私は自分の信念を貫きます。決して曲げることはない。……どんなに卑怯な手を使ってこようと、己の魂だけは穢させはしない」

カッと見開いた松陽の目は爛々らんらんと輝き、強い眼光に射られた土方達は思わず言葉を失った。

「こんな事を言えば勝手だと皆さんは仰るでしょうが……もし、私に何かあっても、絶対に手を出さないでください」

「でも……ッ！」

山崎が反論を試みようとした時、す、と土方がそれを遮った。

「……過去は変えられねエ……俺達が過去こしに來ちまったことはしょうがないとしても、それ以上のコトはするなってことだな？」

「・・・ええ、そういうことです。・・・この先、あの子達は重大な決断を迫られる時が何度となくあるでしょう。それを乗り越え皆さんの元いた時代に生きている。・・・ならば、ここで過去を変えたら、未来が変わっちゃうかもしれないでしょう？未来から来た貴方達にだって影響があるかもしれない。だから、絶対に手を出さないでください。何があっても。たとえ・・・私が、死んでも」

ひゅ、と息を呑んだのは誰か。

もしそれが現実になった時、手を出さずにいられるかと聞かれれば、答えは“否”だ。だが、タイムパラドックスの恐ろしさは、フィクションの世界でも語られる通りだ。

真選組が無くなっているかもしれない。

もしかしたら、自分達が消えてしまう可能性だってある。

そう、近藤だって、どうなるかわからない――。

些細なことで未来が大きく変わってしまうかもしれない。もしもの世界があるとしたら、それこそ星の数を軽く超えるだろう。

もし、あの時こうしていたら。そう思うことはきっと一生に何度もあるのだから。

「・・・わかった」

「土方さん!？」

「副長!！」

「俺は見捨てるぞ、アンタをな」

「ええ、構いませんよ」

「……悪いな、俺が一番大事なのは、真選組と近藤さんなんだ……」

土方の言葉に、沖田と山崎はハツとして口を噤んだ。

過去の理不尽さに憤るあまり、元いた時代のことを失念していた。

「すいやせん、松陽先生……俺も、大事なもんが未来にたくさんあるんでイ」

「先生……僕もです」

「……それで、良いんですよ」

その達観しきった笑顔。

思い返せば、それが土方達が見た松陽の最後の笑顔だった――。

その夜――雷鳴が轟く中、影が蠢く。

「……悪く思うなよ、地球人……貴様の思想は我々にとって危険すぎるのだ」

運命の日（前書き）

久々の更新がこんな話って・・・。
まもなく、クライマックスです。

運命の日

皆が寝静まった頃、松陽は机の上に向けていた視線を部屋の外――影だけが障子に映っている――へ向けた。

「・・・どなたですか？」

その影は2メートルはあると思われる大きなもの。そして編みがさのようなモノを被っている。

松陽は目を細めた。

「私を殺しに来たんでしょう？・・・いつ来るのかと・・・ずっと思っていましたよ」

立ち上がって傍に置いていた刀を手に取り、鞘から引き抜く。

白刃あんどんが行灯の光に照らされて鈍く光る。

「わかつているならば話は早い・・・大人しく殺されろ、吉田松陽」
ス、と開けられた障子のむこうに立っていたのは、やはり天人だった。

「・・・先にしびれを切らしたのは幕府ではなく・・・天人の側だったようですね」

「幕府にも愚かではない者がいる、ということだ」

「なるほど・・・私の嘆願に耳を貸そうとした高官がいたということですか・・・それで、いよいよもって私が邪魔になったというわけですね」

冷静に受け答えをする松陽に、天人はクツリと笑った。

「殺すには惜しい男だ。お前のような奴が高官にいたならば・・・もう少し手間がかかっただろう」

「既に幕府の中には天人に通じている者がいる・・・そういうことですか」

「ククク・・・賢すぎるのも考えものよな？それが原因で命を奪われる羽目になる」

天人が肩を揺らす。

先程から天人から一切の殺気を感じない。殺されろ、そう口にしてはいるが、その意志を感じられないのだ。

殺すには惜しい――そう言った通りに思っではいるようだが、おそらくそれ以上に“殺し慣れている”のだろう。

「・・・こういうことを主に引き受けている・・・？」

「わかるか・・・まあ、無駄な殺生は好まぬが・・・命じられれば殺す。ただそれだけだ」

殺すことに快楽を覚えている、というよりは淡々と事務仕事をこな

すように対象者を殺している、という方が正解のようだ。

ならば、客人や銀時が殺されることは——まずない。

松陽はそこまで考えると、刀を中段に構えた。

「・・・ナルホド、大人しく殺される気はないということか」

「この身をどうされようと、己の魂だけは穢させはしません・・・」

それは己の武士道^{ルール}。

子ども達にも口を酸っぱくして言い続けてきた。

「（銀時、ごめんなさい——もう少しあなたの傍にいてあげたかった）」

忠告をされた時点で口を噤むこともできた。この地から離れることだってできた。

それでも己の考えを曲げなかったことを誇りに思っている。そして、子ども達にも誇ってもらいたい。

「（・・・勝手、ですね）」

心の中で呟き、フツと笑った。

それは自己満足に過ぎない。きっと己が死ねば子ども達は悲しむ。

高杉などは酷く落ち込むだろう。未来の話、それもただの予測を聞

ただだけでもあれ程に取り乱したのだから。

「このような事態に際しても微笑^{わら}うか」

松陽の表情を見て天人は不思議そうにしながらも、機嫌よく呟いた。

泣いて命乞いをされたりなどしたら興ざめだ。そういう輩を何人も見てきたが、どうやらこの男は違うらしい。

「・・・簡単には殺されてやりませんよ」

「ククク・・・面白い奴だ」

実に——惜しい。

天人はその手に持った大振りの刀を松陽に向けて振り下ろした。

ギン！

「・・・ほオ」

己の一撃が受けとめられ、天人は感嘆の声をあげた。

「・・・くっ」

だが、受けとめるのがやっとだったようで、松陽の額には玉のような汗がうかんでいた。

大柄な天人だけに一撃一撃が重たい。ガンガンと打ち込んでくる天人の刀を防ぐので精一杯で、攻撃に転じることができない。

「っ……」

腕がしびれてくるのがわかる。

あっさり殺されるのも御免だが、いくら寝汚い銀時であつてもこれだけ騒げは起きてしまう。

それに、彼らへも忠告はしたが、そうそう簡単に己を見捨てられるとは思えない。そういう人間だからこそ銀時が心を許しているのだ。

「少しはっ……こちらの事情も酌んで欲しいものですね……ッ！」

天人の刀をなぎ払い、松陽は距離を取る。

「襲撃者に向かって言う言葉ではないな」

「……わかっていますよ」

だが、ぼやかずにはいられない。なぜ、家人のいない時を狙って来てくれなかった。

否応なしに、巻き込んでしまふでないか――。

「せんせ……?」

耳に馴染んだ声が聞こえた。

「いけない!……銀時っ、来ちゃダメです!!」

まだ、銀時にはこちらの様子は見えていない。だが、物音で何が起こっているかくらいはわかっただろう。

「・・・これが、事情とやらか」

クツクツと天人が笑う。

「安心しろ・・・無駄な殺生は好まぬと言ったろう？」

だが、自分に刃向うならば別だろう。

間違いなく、銀時は・・・。

「っ！」

ここで初めて松陽が攻撃に打って出た。

「!・・・ほう、先程までは抵抗しかなかったものを・・・余程大切なモノらしい」

猛攻と言っても良いだろう。その細腕から繰り出される一撃は意外なほど重い。

「ククク・・・楽しいなア・・・お前ほど気骨のあるターゲットは今までいなかった」

「たあげ・・・と？標的・・・という意味ですか」

「そう。そして俺は・・・ターゲットを殺し損ねたことはない」

一閃。

袖が斬り裂かれ、脇腹に痛みが走る。

徐々に熱を帯びてくるそこにそろりと手をやれば、ぬるりと生暖かいものがついた。

「・・・く」

まだ動ける。だが、目の前にいる天人の男との実力差は目に見えている。

何とかして銀時を遠ざけなければ。

土方達も気付いているだろうが、松陽の忠告を聞いて自室にこもっているのだろう――が、それもいつまで我慢が効くか。

「せんせえっ!!」

「!!」

来るなど言ったのに・・・いや、松陽はわかっていた。銀時が己を見捨てるはずがないと。

天人の視線が銀時に向けられる。同時に銀時も天人を視界に入れた。

「あまん、と？」

銀時の視線が松陽に移り、その左手が脇腹を押さえているのを見た。

「ぎんっ・・・」

「先生を、斬ったの・・・お前か？」

ざわり。

「ほう・・・」

感嘆の声が天人から漏れる。

松陽も今まで感じたことがないほどの場を満たす殺気。その発生源は——銀時。

「お前がつ・・・」

「そうだと、言ったら？」

尋常ではないその殺気で天人の興味を引いてしまった銀時に松陽は慌てた。

「銀時っ・・・いけません！！逃げて！！」

脇腹の創きずが思ったよりも深い。一步踏み出そうとして、かくりと足から力が抜けた。

そこからはまるで時間がゆっくりと進んでいるような感覚だった。

松陽の意志

銀時が、いつも大切そうに抱きしめている刀を抜き放ち天人に斬りかかる。天人がそれを片腕で防ぐ。

何度か打ちこもうとするものの銀時の攻撃は全く当たらず、天人が刀を横に払うのを避けそくなって頬が軽く裂ける。

「銀時っ！・・・やめっ」

松陽が叫ぼうとした時、銀時の腹部に天人の突き出した刀がわずかに刺さったように見えて息を詰めた。

天人も刀がひっかかった感覚はあったのだろう。ほんの一瞬動きを止めた。

銀時の破れた着物の懷からわずかに血がついた教本が落ちる。天人と松陽の視線がその教本に向けられた。

その一瞬の隙を銀時は見逃さずに天人の背後に回り、その肩に思いっきり刀を振り下ろした。

「————ぐっ」

低く天人が呻く。だが銀時の全体重をかけても腕を落とすまでは至らない。しかも、銀時が狙ったのは刀を持つ右肩。

しかし、松陽は打ち合った時にわかっていた。天人の利き手は“右

” じゃない。

「銀時っ!!」

もう痛みなど感じなかった。なりふり構わず無我夢中で銀時の元へと駆け寄った。

「先生!!」

銀時の叫び声と、反射のように繰り出された天人の一撃。

背中が燃えるように熱い――武士ならば最も恥じるべき場所に新たに作られた創きず。だがそれは松陽にとっては誇りにできる創だった。

「ぶ、じ……です、か？」

力いっぱい抱きしめていた身体を離して銀時の顔に触れながら松陽は訊ねる。

月明かりで余計に青白く見える顔に浮かんだのは安堵の表情。

「せ、んせ……っ」

子どもでも一目でわかるくらいに深い、肩口から腰のあたりまである背中の創。やっとのことで上半身を支える片腕もガクガクと震え、いつ倒れ伏してもおかしくない。

「せん……せ」

激痛のせいでわかりにくい足が動かない。おそらく背中の創のせ

いだろう。

目に映るボロボロと大粒の涙を流す銀時の顔がかすむ。

まだ死ねない。

「にげ、なさい・・・銀時・・・」

天人の先程の一撃は反射的なもので、殺気は全く感じられなかった。それに彼の目的は果たされた。無益な殺生はしないはず。

「や・・・やつ・・・」

首をフルフルと横に振る銀時に、松陽は笑みをうかべた。

「・・・生きて・・・ください・・・己の魂が、指し・・・示す、
ままに・・・」

—————私の、愛しい子銀時。

己の名を口にして、松陽はその場に倒れ伏した。

最後の力を振り絞って告げられた言葉に、銀時はただ涙するしかなかった。

天人の表情は凜いでいた。仕事は終わったとばかりに大振りの刀を鞘にしまい、故意に避けていた松陽の文机に視線を向ける。

「嘆願状・・・やはり、まだ書いていたか」

これが幕府に渡っていれば危なかった。今までの強硬路線を変更する可能性が高くなっていただけに。

このようなものを残しておくわけにはいかない。これは幕府の中にいる“賢き者”への警告だ。意志を継がれては困る。

なるべく残酷に。ああはなりたくないと思わせるように殺せと言われている。

だが、天人の男は己に興味を抱かせるほどの殺気を放ち、肩に創をつけたこの子どもにその様子を見せたくはないと思った。

この子どもの心を折るのは容易い。が、己を憎み追ってくるならばその方が面白いと思った。

この子どもは、ただ命じられるままに相手を殺してきた己の日常に刺激を与えてくれる者へと成長するやもしれない。

ただの気まぐれ。だが、半分以上本気でそう思いながら天人は銀時を見やった。

「・・・真白の子鬼」

銀時はビクリと肩を跳ね上げさせた。

「俺を恨むならば恨め、憎むならば憎め・・・それを糧かてに生きて行け」

銀時が振り返るよりも早く、天人は銀時の首根っこを捕まえて吊り上げた。

「は、放せっ！放せえっ！！」

バタバタと足をバタつかせて暴れる銀時の首を腕で締めあげる。

「う・・・ぐ・・・っ！！」

徐々に抵抗する力が弱くなり、カクン、と突如力が抜けた。

天人は落ちていた教本と刀を拾い上げ、銀時を担ぎ屋敷の門の外に出るとその場に放り投げた。完全にオチているためか銀時が起きる様子はない。

しばらく銀時を見つめていた天人だが、スッと視線を外して再び松陽の私室に戻ってきた。

倒れ伏す松陽に無感動な視線を向け、すらりと刀を抜く。

「侍とやらはこうして“^{シルシ}首”を取り、罪人を裁くらしいからな。より効果があるだろう」

淡々と作業をこなし、天人はその“^{シルシ}首”を部屋にあった風呂敷で包んで小脇に抱え、行灯を見やる。

「・・・証拠隠滅にはこれが一番か・・・」

天人は呟いて行灯を蹴倒す。^{けたお}

油がこぼれ畳に引火すれば木造の屋敷は容易く燃え落ちる。火の勢いは徐々に大きくなっていった。

屋敷の外に出た天人は燃え上がる屋敷に背を向け、門の外で気絶している銀時に歩み寄った。

「自分でもらしくないことをしたと思うが・・・真白き子鬼、いつか俺を殺しに来い。楽しみにしているぞ？」

クツリと笑い、天人は屋敷の前の坂を下って行く。

村は大騒ぎになっていた。松陽の家が燃えているのが遠目でもわかるくらいになったからだ。

「ありゃ、先生の家だ！」

「いかん、若い衆を叩き起こせ！火を消すんじゃ！」

騒ぎに乗じて、天人は村塾とは逆の方へと向かっていく。

トン、と何かが足に当たり、天人は下を向いた。

「あ、ごめん・・・な、さい」

急いで走っていた小さな子どもが足にぶつかってしまったらしい。

振り返って素直に謝るがきつそうなツリ目が己を訝しむ様に見るのに天人は口の端を吊り上げた。

「・・・いや」

この一瞬の邂逅がこの子どもに大きな創を負わせることになるの

は、攘夷戦争の真っ只中のこと——。

どうにも出来ないこと

事が起こる少し前、土方達は万事屋の子ども達に今の状況を言い聞かせていた。

「どーしてヨー!!」

「だーかーらー・・・無事に帰るために大人しくしとけって言ってるんだ」

イライラとしながら土方がパシン、と膝ひざを叩いた。

「でも・・・そしたら・・・先生が」

「じゃあ、未来に帰ってみたら旦那がいなくなっても良いってのかイ?」

「そんなこと言ってないアル!!・・・でもっ、先生を見捨てるのは嫌ヨ!」

沖田に言われて神楽がギロリと睨みながら声をあげる。

「・・・それが、吉田さんの忠告だとしてもか?」

土方が言えば、新八がおずおずと手をあげた。

「あの・・・そしたら僕達は帰れるんですか?」

「新八!!」

神樂が耳元で叫ぶのをスルーして、新八は土方を睨むように見つめた。

「松陽先生を見捨てれば、僕達は帰れるんですか？」

「し、新八君・・・それは・・・」

山崎が慌てる。

新八の問いは純粹に未来に帰れるのかという確認ではなく、松陽を見捨てると言った土方を責めるためのものと気付いたからだ。

「保証はねェよ・・・だが、未来から来た俺達が過去に余計な手を加えちゃいけねェ・・・そうだろう？」

「・・・それは、そう、ですけど・・・もう、充分に僕達は関わってますよ!!」

「そうネ!! 松陽先生を助けることが出来るかもしれないのに・・・そしたら、銀ちゃんだって・・・ヅラや片目だって・・・」

絶対に喜ぶに決まっている。

そう呟く神樂の声は徐々に小さくなっていく。

「・・・わかってんだろ・・・そうなりや、万事屋なんてもんは無くなってる可能性が高くなる。オメェらだって出会わなかったことになってるかもしれねェ」

土方の言っていることは本当に有り得る話だった。

過去を変えればどうなるか——フィクションの世界の話ではあるが見聞きしたことがあるだけに大体想像はつく。

「・・・攘夷戦争に地球人側が勝ってターミナルも建つこたア無くて、真選組なんてもんも結成されてなくて・・・そんな未来が待ってるかもしれないねェなんて、俺ア御免だ」

攘夷戦争に負け、天人の支配あつての真選組だ。今更過去を変えようなんて思いもしない。

例えそれが多くの犠牲の上に成り立っているものだとしても。

「・・・土方さん・・・」

思いの外、切実な声が出てしまったらしい。新八が複雑そうな表情をうかべた。

「とにかく・・・過去のことに手は出さねェ・・・決まりだ。良いな?」

確認すれば、新八と神楽が渋々頷いた。ゴネてはいたが2人にもわかっていたのだろう。

「副長・・・手は出さないっていても、巻き込まれたらどうするんです?」

山崎が確認してくるが、もちろんその場合も考えていた。

「そんなときやアレだ。巻き込んだヤローを」「」「ぶった斬る」
「」「」・・・！・・・テメーら」

「一蓮托生でさア、土方さん。・・・アンタだけに責任負わせるつもりはねエですぜイ」

未来が変わってしまったら、ここにいる全員の責任。

上手く話がまとまったところで、母屋の真ん中——松陽の部屋の方角からガタンと大きな音が聞こえた。

「！」

思わず腰を浮かせた新八が、グツと唇を噛んだ。

「奴^{やつ}さん、とうとう襲^{やっ}って来やがったか？」

「幕府か天人か・・・どっちなんでしょうねイ」

「・・・松陽先生、そろそろだっと思ったから、俺達に忠告したんでしょうね・・・」

真選組3人は感情のコントロールに慣れているせいか、淡々とそんなコトを口にする。

「・・・だから、オマエ等嫌いヨ。何でもわかってますみたいなツラして・・・」

そんな真選組の面々が氣にくわなかったのだろう。神楽がムツとし

ながら呟く。

ドン！

「・・・っ」

松陽が戦っているだろう音に、新八が悔しそうに表情を歪める。

「————ですっ!!」

小さく聞こえた松陽の必死な声。

神楽がピクリと反応した。

「・・・銀ちゃん・・・？」

「————せんせえっ!!」

甲高い子どもの声だからか、注意深く耳を澄ませていたからか・・・
銀時の叫ぶ声がハッキリと聞こえた。

「・・・土方さん・・・すいやせん・・・やっぱ、無理でさア」

のそりと沖田が立ち上がるのを見上げ、土方は溜息をついた。

「はああああ・・・どーせ、我慢なんざ出来るわきゃねーってわかってたよ」

————俺も同じだ。

土方も呟いて立ち上がった。その手は既に刀の柄にかけられている。

「・・・沖田さん、土方さん・・・！」

新八の表情が輝き、首を傾げていた神楽もその様子にようやく理解が及んだのかぴよこん、と立ち上がった。

「行って良いアルか！！」

「あー・・・・・・行ってよし」

許可を出すのと同時に部屋を飛び出した神楽と沖田、新八を見送り苦笑をうかべる。

もうどうなったって知るか。

目の前の助けられるかもしれない人を見捨ててきたなんて言ったら、近藤にどやされる。いや、それだけで済めばいいが軽蔑の視線を向けられたりしたら居た堪れない。

「真選組が無くなってたら・・・近藤さんに土下座して謝るさ」

「・・・俺も付き合いますよ、副長」

「ああ・・・行くぞ、山崎」

「はい！」

部屋を飛び出し、松陽の部屋へと一目散に駆けていく。

そして現場に突入しようとし——足を止めた。

「……総悟？」

「土方さん……」

立ち竦む沖田の肩に触れてこちらを向かせれば、やけに顔色が悪かった。

「……チャイナが……」

神楽がどうかしたのかと視線を向けて、土方は絶句した。

「どうしてヨ!! なんで……なんで、攻撃がすり抜けるネ!!」

天人に殴りかかっている神楽の攻撃がその身体をすり抜ける。天人だけではない。松陽に触れようとしている新八の手も松陽の身体をすり抜けたのを視界に収めて眉を顰めた。

土方達は互いに触れ合うことは出来ても松陽達には触れられない。しかも松陽達の目には自分達の姿は映っていないのだ。

「どうあっても……歴史に介入させねエってか……」

結局のところ自分達は見ている事しか出来ないのか。

こんなところに勝手に連れて来てあれだけ関わらせておいて、ここぞという時には傍観していると言うのか。

「……くそっ!!!!」

いらだち紛れに叫ぶが、その声すらも虚空に消えていくようで土方はやるせない気持ちになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7555r/>

ギンイロトラベラーズ

2012年1月12日23時56分発行